

# 西ノ辻遺跡第22次発掘調査報告

1990

東大阪市教育委員会  
財団法人 東大阪市文化財協会

## 本文目次

I.はじめに.....	1
II.調査結果.....	2
層序.....	2
造構.....	4
III.出土遺物.....	12
中世の遺物.....	12
古墳時代の遺物.....	15
弥生時代後期の遺物.....	15
弥生時代中期の遺物.....	19
IV.まとめ.....	19

## 挿図目次

第1図 調査地位置図.....	2
第2図 調査区中央東西断面.....	3
第3図 調査区東端南北断面.....	3
第4図 西ノ辻遺跡第22次発掘調査出土造構平面図.....(折込).....	5～6
第5図 中世造構平面図.....	7
第6図 海獸葡萄鏡.....	8
第7図 木製人形実測図(奈良時代).....	8
第8図 カマドセット出土状況平面図.....	10
第9図 弥生時代後期溝平面図.....	11
第10図 中世遺物実測図.....	13
第11図 奈良時代遺物実測図.....	14
第12図 古墳時代遺物実測図.....	16
第13図 SK-01出土中世土器実測図.....	17
第14図 弥生時代後期土器実測図.....	18

第15図	弥生時代中期土器実測図	20
第16図	弥生時代中期土器実測図	21
第17図	土塙墓平面実測図	22
第18図	石庵丁実測図	23
第19図	石庵丁実測図	24
第20図	打製石器実測図	25
第21図	石器実測図	26
第22図	木製品実測図	27
第23図	木製品実測図	28
第24図	木製品実測図	29
第25図	木製品実測図	30
第26図	木製品(下駄・漆器椀)実測図	31
第27図	木製品(杭)実測図	32

## 図 版 目 次

- 図版 1 調査前風景（第1トレンチを西より望む）上  
調査地全景（東より）下
- 図版 2 東壁断面（西より）上  
SE-02検出状況（北より）下
- 図版 3 中世遺構検出状況（北より）上  
中世遺構（柱穴・溝）検出状況（北より）下
- 図版 4 SE-07発掘状況（東より）上  
SR-17遺物（下駄）出土状況（北より）下
- 図版 5 中世土塙墓検出状況（南より）上  
SE-01人形出土状況 下
- 図版 6 中世河川（SR-17）検出状況（東より）上  
SE-09検出状況（南より）下

- 図版7 SR-17獸骨（ウマ）出土状況（北より）上  
SR-17獸骨（ウシ）出土状況（東より）下
- 図版8 奈良時代河川（SR-11）検出状況（北より）上  
奈良時代河川（SR-11）遺物出土状況（北より）下
- 図版9 奈良時代河川（SR-11）銅鏡出土状況（東より）上  
奈良時代河川（SR-11）須恵器出土状況（南より）下
- 図版10 SD-89弥生土器出土状況（西より）上  
弥生土器壺出土状況（南より）下
- 図版11 SR-25弥生土器出土状況（北より）上  
磨製石剣検出状況 下
- 図版12 弥生時代河川検出状況（東より）上  
弥生時代河川検出状況全景（東より）下
- 図版13 土師器小皿・瓦器碗
- 図版14 土師器小型甕・須恵器提瓶・土馬
- 図版15 土師器甕・弥生土器甕・器台・台付鉢
- 図版16 弥生土器壺
- 図版17 弥生土器壺
- 図版18 弥生土器壺・甕・高杯
- 図版19 弥生土器甕
- 図版20 弥生土器鉢
- 図版21 石庵丁
- 図版22 石庵丁 上 磨製石剣・石斧・石鎌 下
- 図版23 杖
- 図版24 木製容器・曲物
- 図版25 桶
- 図版26 絵画土器（シカ他）・ウマ頭骨

## I. はじめに

西ノ辻遺跡は、東大阪市西石切町1丁目、3丁目、東山町、弥生町にかけてひろがる縄文時代から中世にかけての集落遺跡である。遺跡は、標高7~20mの西に向かってゆるやかに傾斜する低位段丘上に位置する。西方に河内平野がひろがり東方には、生駒山がそびえる。北及び南方は、生駒山から河内平野に向かって派生する低位段丘が存在する。これらの低位段丘は、生駒山から西下する小河川によって、1~2kmごとに区切られている。

小河川によって区切られた段丘上に各時代にわたって集落が営まれた。東大阪市域に限って主要な遺跡を述べれば、北より南に日下・芝ヶ丘・西ノ辻・鬼塚・縄手・馬場川遺跡が順に並んで所在する。これらの遺跡は、縄文時代から中世にかけて人々が居住した集落跡である。西の河内平野は、縄文時代、海が侵入し河内湾となっていた。当然ながら縄文時代の集落は存在しないが、西ノ辻遺跡の西方より南の部分は、弥生時代に陸地化し、河内湾も淡水の河内湖に変化したため鬼虎川遺跡や水走遺跡に初めて、稻作を開始した人々が生活した。両遺跡に住んだ人々は河内湖の縁辺に形成された湿地で稻作を行い湖に流れ込む河川によって形成された自然堤防上に居を構えていたことが発掘調査によって確認されている。西ノ辻遺跡は、昭和16年に行われた発掘調査で多数の弥生時代中~後期の遺物が発見されたことから、弥生時代の集落址として著名であった。しかし、近年の近鉄東大阪線開設に伴う発掘調査によって縄文時代中期後半の河川、弥生時代中期の河川、溝、方形周溝墓、甕棺、井戸、古墳時代中期後半の河川、集水造構、古墳時代後期の河川、奈良~平安時代の河川、鎌倉時代~室町時代の住居址・井戸・墓、鎌倉時代の河川などが検出されている。現在、西ノ辻遺跡は、以上の調査結果から縄文時代中期末~室町時代に至る長期間の集落址であったことが判明している。

この遺跡に住んだ人々は、縄文時代には、生駒山で鹿や猪などの動物を狩ったり、木の実を拾ったり、海で魚貝類を採集して生活をしていた。弥生時代以降も、河内湖の湿地で水田を耕作するほかは、前時代と同様の食料の確保を行っていたようである。各時代とも同時に存在した他の遺跡(集落)とは、距離が非常に近いことからみて、密接なつながりを持っていたことが想像できる。

調査は、国道308号線拡幅工事に伴い行ったものである。今までの周辺部の調査によって調査地は、南東から北西に向かって流れる弥生時代の河川の南側肩口にあたる部分と想定される場所であった。また、河川の埋没後は、南北朝期の集落が存在することも予想された。したがって今回の調査の目的を河川の流れの追求と南北朝期の集落のひろがりを明らかにすることに定めた。

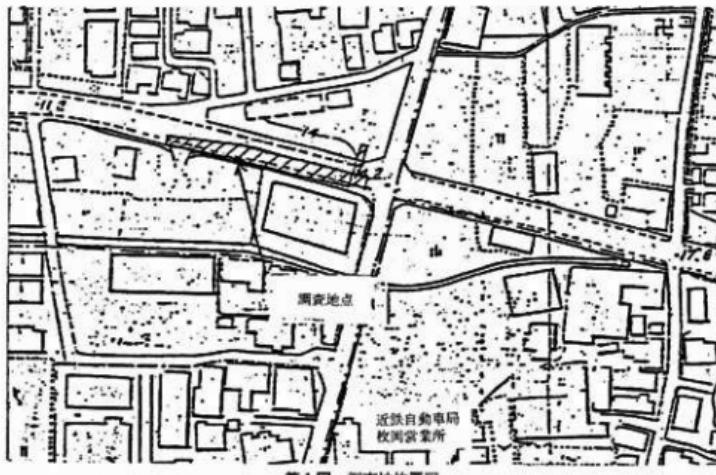
## II. 調査結果

調査地は、旧国道170号線と国道308号線の交差点すぐ西側の国道308号線の南側歩道に沿った所である。調査面積は、485m<sup>2</sup>である。以下、層序、遺構、遺物の順に明かになった点を記す。

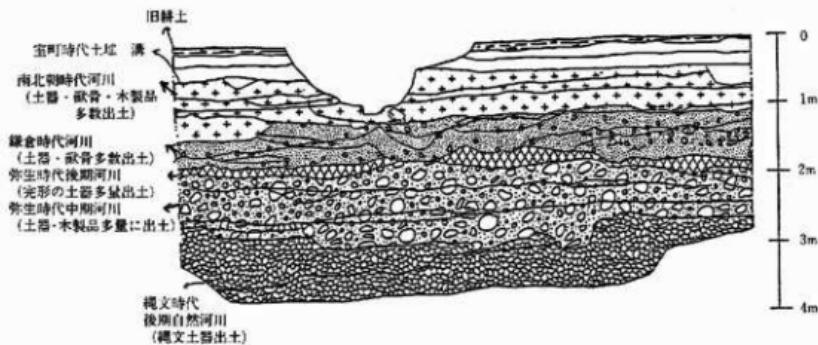
### 層序

調査地が東西に長かったため層序は、東端と西端でかなり異なり埋没河川の存在した場所とそうでない所、あるいは道路造成時に削平を受けた所と受けなかった所で違う。従って今は、埋没河川が存在し上部の削平もほとんど受けていなかった調査区西端の土層について報告する。

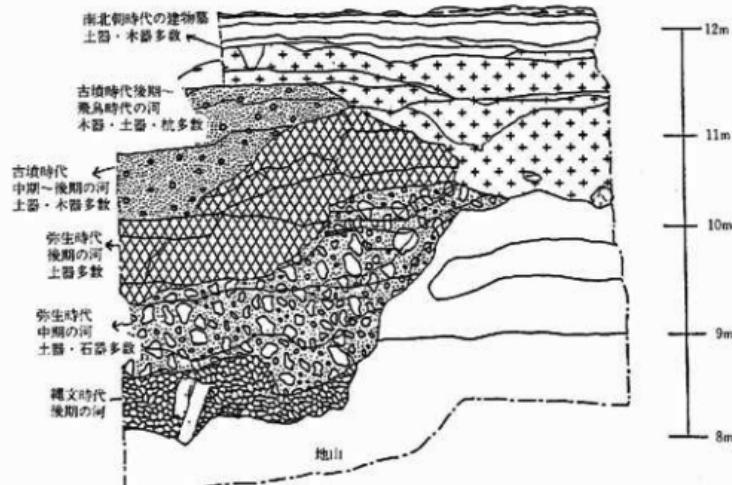
第1層、耕土(厚さ8cm) 第2層、青灰色砂質土(厚さ8cm・底土) 第3層、暗青灰色砂質土(厚さ16cm・室町時代の遺物少量含む) 第4層、黄褐色砂質土(厚さ8cm・室町時代の遺物少量含む)  
第4-A・B層、暗黄褐色砂質土(厚さ10cm、SX-01の堆積土、天目茶碗、滑石製石鍋 etc、室町時代の遺物出土) 第5層、黄褐色砂質土(厚さ20cm、南北朝期の掘立柱建物の柱穴内堆積土、第6-C層上面より切り込む) 第6-A～G層、(厚さ160cm、黄褐色砂質土と暗灰色砂礫の互層、古墳時代後期末～飛鳥時代にかけての河川の堆積土、須恵器・土師器・木製品出土) 第7-A～C層、(厚さ130cm、青灰色砂・シルト層、古墳時代後期の河川の堆積土、須恵器・土師器出土、上部を第6-A～G層によって切られる。) 第8-A～J層(厚さ140cm、暗青灰色砂礫シルト・粘土 etcの互層、弥生時代中期末～後期にかけての河川の堆積土、弥生土器・木製ヒャク・石器出



第1図 調査地位置図



第2図 調査区中央東西断面



第3図 調査区東端南北断面

土) 第9-A～R層(厚さ180cm、暗茶褐色砂礫、粘土の互層、弥生時代中期初頭～中頃にかけての河川の堆積土、弥生土器・石器・獸骨・木の実など出土) 第10-A層、暗青灰色砂礫(厚さ72cm自然木を含む無遺物層、縄文時代中期末?) 第11層、緑灰色砂質粘土(厚さ140cm、地山で第6-G層および第9-A～R層によって切られる。間層に厚さ40cmの第12層、暗緑灰色砂礫が認められる) 第13層、緑灰色砂とシルトの互層(厚さ120cm以上、地山、第9-Q・R層と第10-A層によって切られる。)

以上である。この層序は、縄文時代中期末、弥生時代中期初頭～中頃、弥生時代中期末～後期、古墳時代後期、古墳時代後期末～飛鳥時代の5時期に河川が存在したことを示している。また河川が埋没した後、南北朝時代の掘立柱建物・溝がつくられ、廃絶後、室町時代に性格不明の落ち込みがつくられるが、以降、耕作地と変化したことを物語っている。

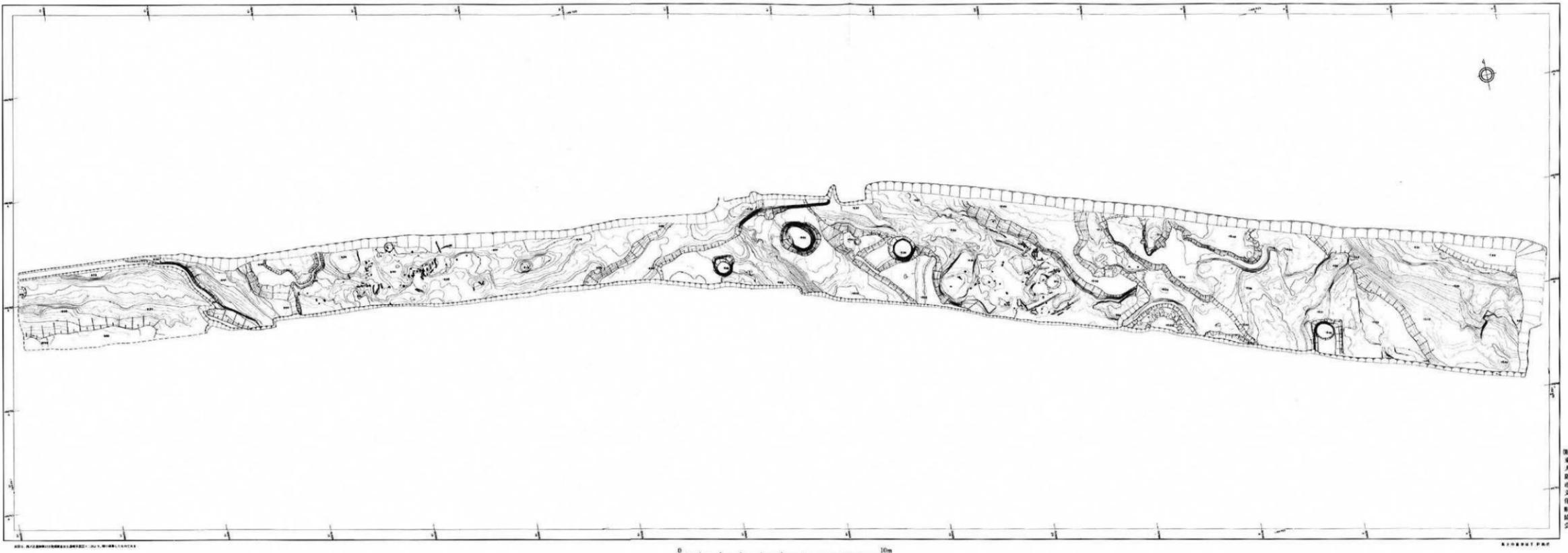
#### 遺構

今回の調査で検出された室町時代以前の遺構は、溝、掘立柱建物柱穴、土塙墓、井戸、河川に打ち込まれた杭列、落ち込みなどである。近世以降の耕作に伴う遺構としては、井戸、ため池、溝、棚田造成に伴う石垣がある。近世以降の遺構説明は省略し、室町時代以前の遺構について時代順に述べる。なお、河川は、厳密に区別すれば遺構ではないが、今回の調査成果の主要なもの一つであるため、あわせて報告する。

「室町時代」調査区東端から西に約15mの範囲にこの時期の遺構が認められた。以西は、中世末から近世初頭にかけて造成された棚田のため削平を受けて存在しなかった。検出された遺構は、落ち込み2ヶ所と溝2条である。調査範囲の制約で全形は、いずれも検出できなかった。落ち込み1は、東西6.4m、南北8m以上の不整形なもので深さは、30cmである。陶器・土師器・鉄鎌・天目茶碗・滑石製鍋等が出土した。溝1は、幅80cm、長さ2m以上、深さ27cmの規模をもつ。遺構の検出状況からみて、この時期の集落は、調査地よりやや離れた場所に存在したようである。

「鎌倉時代末～南北朝時代」掘立柱建物の柱穴と溝は、室町時代の遺構検出範囲と同じであるが、削平を免れた井戸9基が調査地全域に散在して検出した。井戸は、河川の堆積土を掘っていたもの2基、残り7基は、河川の肩にあたる地山に掘られていた。地山に掘られた井戸は、深さ3m前後に及ぶものもあった。

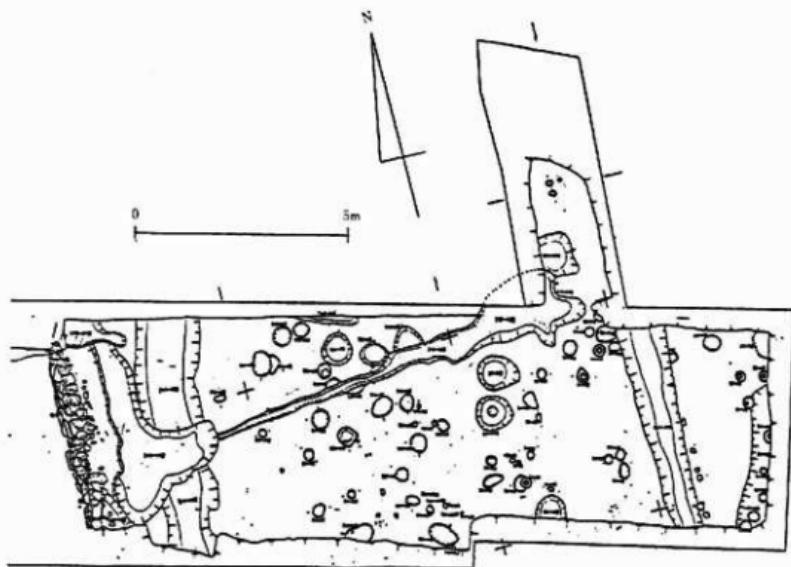
調査地の中央よりやや東側で、奈良時代の河川の堆積土を切った土塙墓1基を検出した。土塙墓の掘り方は、長辺80cm、短辺60cmのやや歪んだ隅丸長方形の平面形で検出面よりの深さ10cmである。内部に成人女性が頭部を北に向けて側臥葬の姿勢で葬られていた。土塙墓内に副葬品はなかったが、埋土内より瓦器の細片と鉄釘2点が出土した。鉄釘が出土したことから木棺であった可能性も考えられるが、木棺の痕跡が検出できず、鉄釘の数も少ないと一応、土塙墓としておく。つくられた時期は、埋土内出土の瓦器と周辺の遺構の時期からみて鎌倉時代末期から南北朝時代と思われる。



第4圖 西ノ社跡第22次発掘調査出土遺構平面図

掘立柱建物の柱穴は、径30cm前後、深さ20cm前後のものが多かった。一部に根石をもつものも認められた。調査範囲の関係で建物は復元できなかった。柱穴内から土師器・瓦器の細片が出土している。

溝は、2条検出した。溝1は、幅80cm、長さ5m以上、深さ40cmの規模をもつ。土師器・須恵器・瓦器出土。位置からみて住居に伴う溝と考えられる。



第5図 中世道標平面図

調査地の中央付近で、鎌倉から南北朝にかけて存在した河川を検出した。河川は、幅20m、長さ5m以上、深さ1.6mの規模をもち、南東から北西に向かって流れる。河川の中央に、流れに直交して、杭を約100本、かなり密に打ち込み水流調節を図っていた。

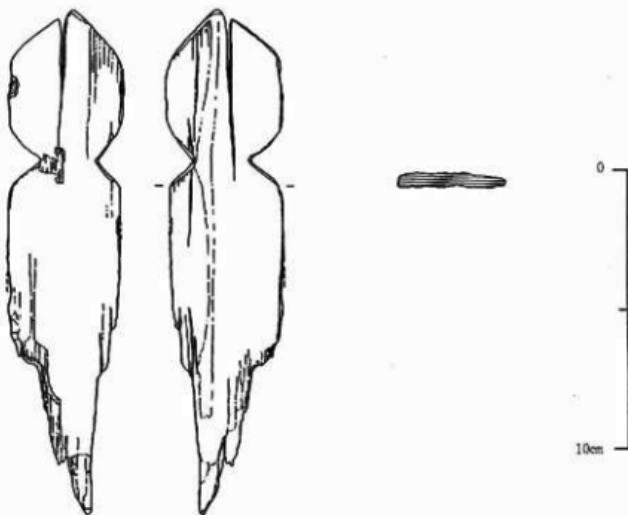
河川内からは、瓦器・土師器・須恵器など土器とともに、ウマ・ウシの骨・下駄・漆器椀・曲物などの木製品が多数出土した。打ち込まれた杭の大部分は、丸木の先端を切り欠いて尖らせたものであるが、角材も含まれていた。角材の杭は、何か他の用途に使われていたものを、杭に転用したものであろう。

この河川は、調査地の東側で検出した掘立柱建物と同時代に流れていたことが、出土遺物より考えられる。



第6図 海獸葡萄鏡(分)

「奈良時代」造構は検出していないが、調査地の中央よりやや東側で河川を検出した。河川は、幅5.2m、長さ5m以上、深さ1mの規模をもち、南北から北西にやや蛇行しながら流れる。河川の流れに直交して杭を約100本打ち込み、杭列とし、水の流れの調節を図っていた。河川の北肩より転落した状況で、ミニチュアのカマド・壺・コシキの3点セットが出土した。川岸で、川に対する何らかの祭りを行った後、捨てられたものと考えられる。この他に、仿製の海獸葡萄鏡1面と人形、底部に意識的に穴を開けた小型の壺など祭りに使用したと思われる遺物が出土している。また、土師器・須恵器などの日常雑器も出土



第7図 木製人形実測図(奈良時代)

していることからみて、調査地の近くにこの時代の集落が存在することが予想される。

「古墳時代後期末～飛鳥時代」調査地東端で、この時期の河川を検出した。幅5以上、長さ5m以上、深さ1.4mの規模をもち、東から北に向かって流れる。南側の肩は確認したが、北側の肩は調査地より北に存在する。性格は不明であるが、円形に打ち込んだ杭列を検出した。堆積土中より須恵器・土師器・コップ型木製品などが出土した。

「古墳時代後記」上記の古墳時代後期末の河川の下層で、後期前半の河川を検出した。また、調査地西端で土塙2基と溝1条を検出した。河川は幅2.4m以上、長さ10m以上、深さ1.3mの規模をもち、東から西に流れる。土塙と溝の性格は不明である。いずれからも須恵器・土師器などが出土地した。

「弥生時代後期」溝1条と河川2条を検出した。溝は、調査地の中央よりやや東に存在した。幅80cm、長さ200cm以上、深さ15cmの規模をもち、北東から南西に延びる。東端は奈良時代の河川で、西端は鎌倉時代の河川によって切られる。溝内より完形の壺2点(内1点は、焼成後の腹部穿孔がある)と器台・甕などが出土地した。溝の性格は不明である。

河川は、弥生時代中期末から後期にかけての時期に調査地東端で1条、後期前半の時期に調査地中央より西よりで1条存在する。前者の河川は、3.2m以上、長さ10m以上、深さ2mで、東から西に流れる。上部を古墳時代の河川によって切られる。弥生土器・磨製石剣などの石器・木製ヒャクなどが出土した。後者の河川は、幅1.5m、長さ25m以上、深さ1mの規模をもち、北東から南西へ、再度角度をかえて北西に蛇行しながら流れる。上部を鎌倉時代末期の河川と、奈良時代の河川によって切られる。弥生土器・石器などが出土地した。弥生土器の中には、完形の壺形土器も含まれる。

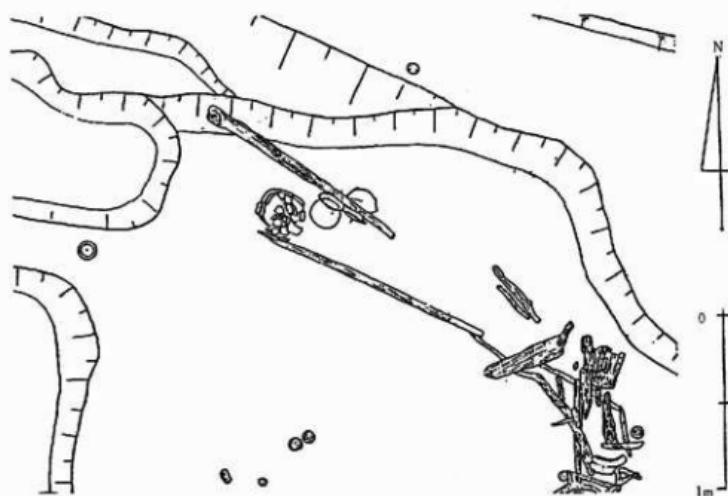
「弥生時代中期」調査地東端で弥生時代中期初頭から中頃にかけての河川と中央から西で中期中頃から後半にかけての河川、各1条と井戸2基を検出した。前者の河川は、幅5m以上、長さ15m以上、深さ1.6mの規模をもち南東から北西に向かって流れる。多量の弥生土器・石器・獸骨(シカ、イノシシ)・桃の種などが出土した。これらの遺物は、出土状況からみて河川の南側の岸から捨てられたものである。後者の河川は、幅7m、長さ20m以上、深さ1mで北東から南西に流れた後、角度を変えて北西に向かって蛇行する。上部を鎌倉時代の河川と弥生時代の河川によって切られる。多量の弥生土器・石器・獸骨(シカ、イノシシ)・木の実と広歛未製品をはじめとする木製品などが出土した。これらの遺物も前者の河川と同じく出土状況からみて河川の南側の岸から捨てられたものである。

井戸は、調査地東側と中央付近で各1基検出された。2基とも河川南岸の肩口に掘られた素掘りの井戸である。前者は長軸64cm、短軸48cmの平面形がだ円形を呈し、深さは40cmの規模である。埋土内より出土した土器より、弥生時代中期初頭から中頃にかけて作られたものである。後者は長軸85cm、短軸75cmのややゆがんだ、だ円の平面形を呈し、深さ40cmの規模をもつ。埋土内より出土した土器より、弥生時代中期中頃から後半にかけてつくられたものである。この井戸が廃絶した後、杭を打ち込んで横木に広歛未製品などの板材を添えて護岸をしていた。

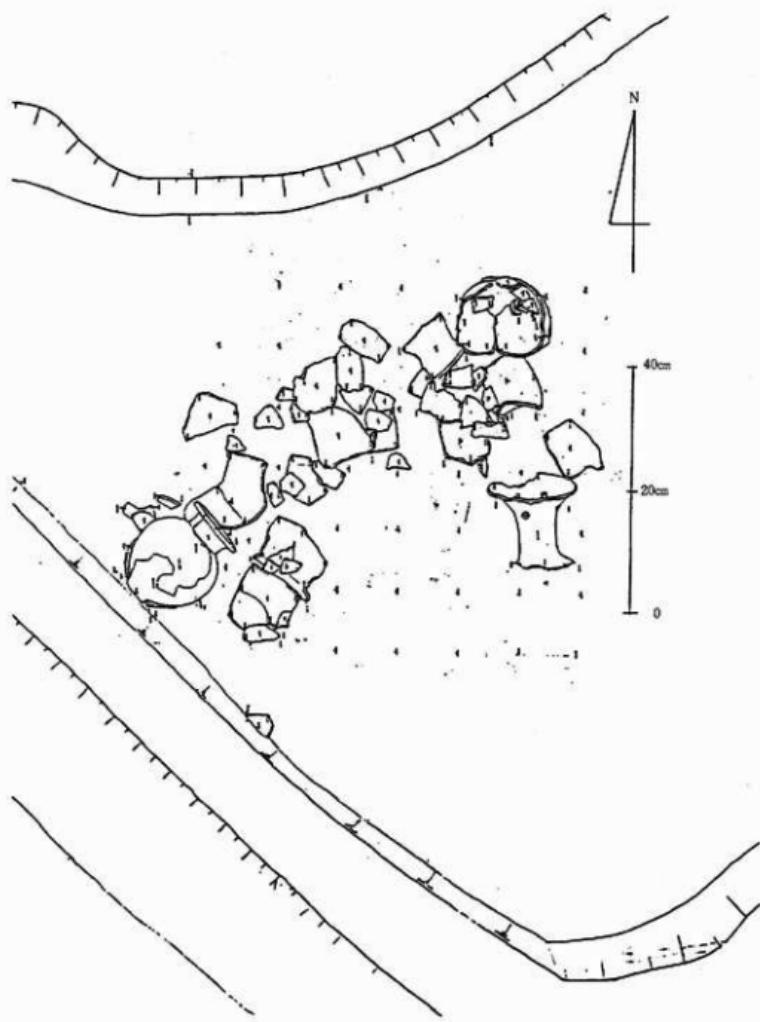
河川と井戸の検出状況からみて、西ノ辻遺跡の集落は、弥生時代中期初めから中頃にかけては、調査地東端の南側付近に位置し中期中頃から後半にかけて西半の南側に移動したことが想像される。

「縄文時代中期末～後期」調査地の中央より西で弥生時代中期河川の下層から検出した。深さ1.2mで流れの方向は、弥生時代中期の河川と同じである。縄文土器の細片少量と自然木、ドングリなどの木の実が出土した。

調査地東端の弥生時代中期の河川の下層でも同様の堆積層が認められたが遺物が出土しなかつたため時期の決定は、出来なかつた。類似の堆積層からみてこの時期の河川の可能性が高い。



第8図 カマドセット出土状況平面図



第9図 弥生時代後期溝平面図

### III. 出土遺物

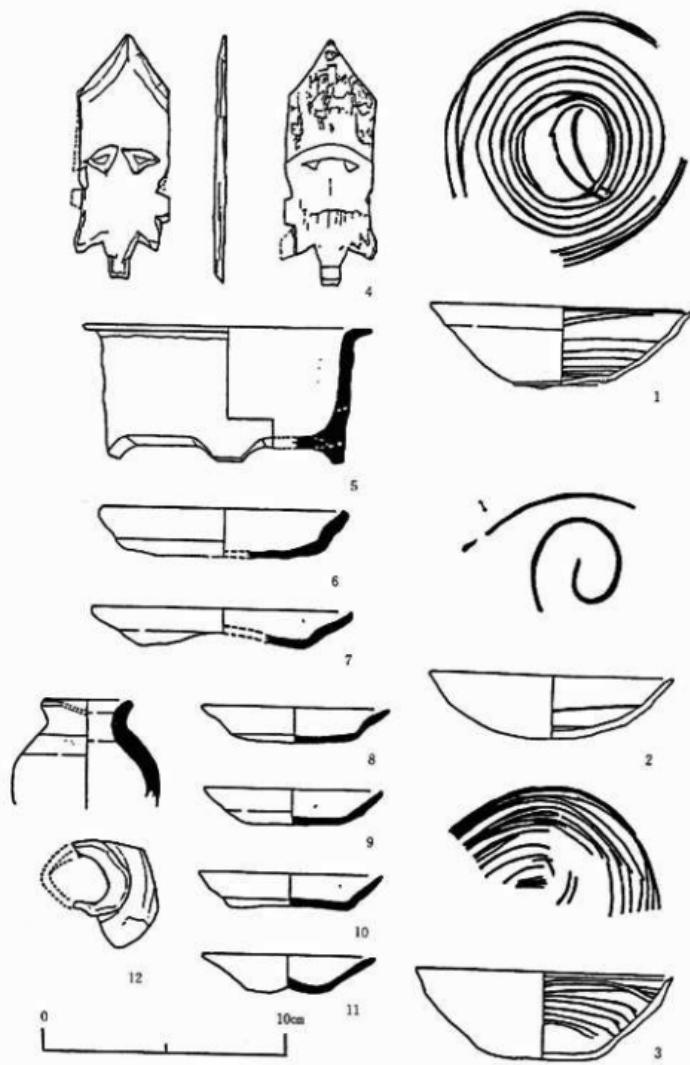
今回の出土遺物の量は、調査面積に比べて異常に多い。コンテナ約300個(普通は、コンテナ50~100個位)の量である。内訳は、土器約200個、木製品90個、石器5個、獣5個である。土器は、弥生時代中期の土器がもっとも多く、次いで中世(鎌倉~室町時代)、奈良時代、古墳時代、弥生時代後期の土器の順である。まだ整理を開始したばかりで全容は把握していないが現状で判明していることを中世に属す遺物から順に時代ごとに述べる。

#### 中世の遺物

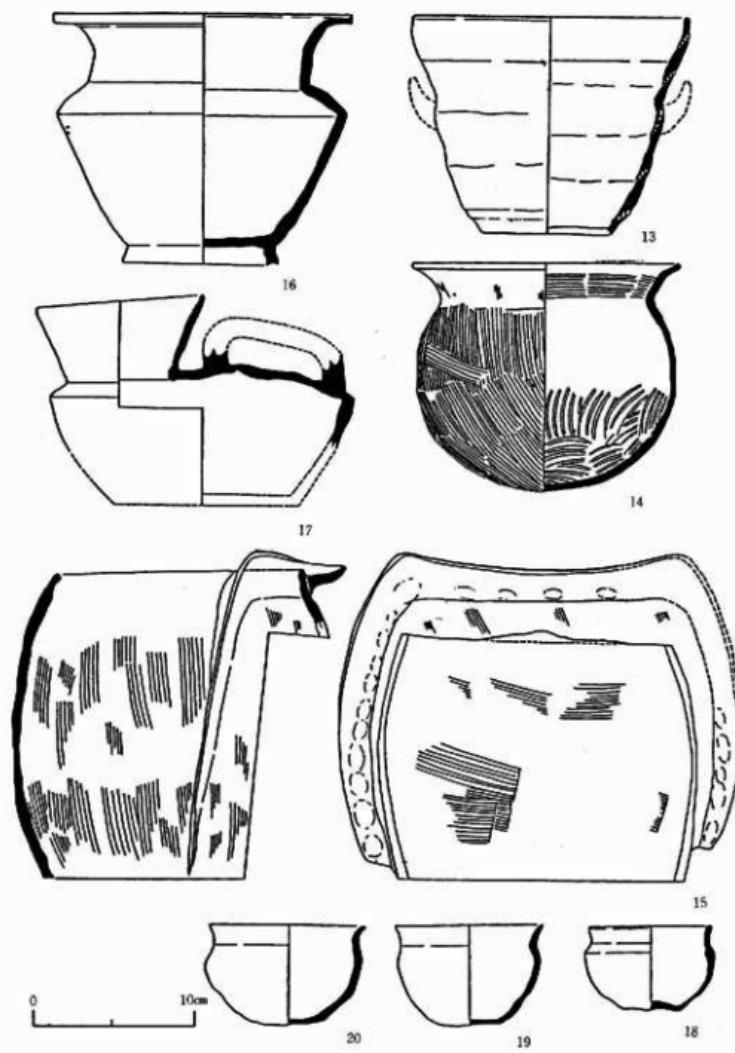
鎌倉時代前期から室町時代に属す遺物が出土した。出土遺物には、瓦器・土師器・須恵器・陶器・磁器・下駄などの木製品・滑石製石鍋などの石製品・ウシ・ウマなどの獣骨類がある。図1~3は、鎌倉時代末期から南北朝時代の瓦器碗である。現在の茶碗と同じ用途で使われたもので、1と3は大和(奈良県)で、2は和泉・河内(大阪府)で作られたことが形から判明する。5は鎌倉時代末期の瓦器香炉である。

6~11は土師器の中皿と小皿で、鎌倉時代末期から南北朝時代のものである。現在の食器の皿と同じ用途で使われたものが大部分であるが、一部、灯明皿として用いられたものもある。4は人形(ひとがた)である。薄い板を加工している。目は三角形にあけられ、髪の毛は、墨で描いている。手と足は、退化した表現である。南北朝時代の井戸から出土した。まじないに使ったものである。12は、備前焼の小型の片口壺である。中に入れた液体を注ぎやすいうように片口にしている。鎌倉時代末期の井戸から出土した。これらの他に曲物・漆器碗・桶などの木製品をはじめ当時の人々が日常使用した道具類が出土している。また、ウマの頭骨(5頭分)、ウシの下顎骨などの獣骨が多く出土した。

「奈良時代の遺物」河川から出土したものが中心である。奈良時代中頃から後半にかけての約50年間に使われた遺物である。須恵器・土師器・木製品・彷彿(日本製)海獸葡萄鏡・獣骨等がある。13~15は、ミニチュアのカマドセットである。13はコシキで把手を欠くが全形を知ることが出来る。口径17.1cm、高さ13.6cmで大きさからみて実用品ではなく、祭り用に特別に作られたものである。本来の用途は、米を蒸す道具である。14は完形の甕である。口径16.4cm、高さ14.4cmで大きさからみて実用品であるが実際に使用した跡はみられない。13と15のカマドとコシキは同じ胎土であるがこの甕のみ胎土が異なる。何らかの理由で本来セットとなっていた甕が欠けたため、実用品の甕で代用したのであろう。15は口径15cm、高さ19.2cmで大きさから祭り用に作られたミニチュアのカマドである。実際に使おうと思えば使用できるが、その痕跡はない。16は須恵器の壺である。須恵器の砂片は、各器種出土しているが、完形品は、この1点だけである。河川の北岸の肩口で検出された。口径18.4cm、高さ15.8cmの実用品であるが検出状況からみて祭りに使用された後、捨てられたものと考えられる。17は須恵器提瓶(さげ



第10図 中世遺物実測図



第11図 奈良時代遺物実測図

べ)である。把手および底部を欠失する。実用品で現代の急須のように使われた。18~20は土師器の小型甕である。3点とも完形品であるが19、20は底部を意識的に打ち欠いている。口径9cm前後、高さ6cm前後である。いずれも実用品として使用されるが今回出土したものは、出土状況や底部に穴が開けられている点からみて祭りに使用したものと思われる。

他に、イヌの下顎骨・人形(ひとがた)・土馬なども出土している。

#### 古墳時代の遺物

古墳時代後期前半と後期後半から飛鳥時代にかけての遺物が出土している。21、22は土師器の甕で、21が底部の一部を欠失する他は、ほぼ完形である。21は口径12.6cm、高さ16cmの中径、22は口径8.8cm、高さ9cmの小型の甕である。用途は煮沸に使う土器である。21は実際に使われた痕を示す焼が付着している。2点とも胎土からみて地元で作られた土器ではない。古墳時代後期後半に作られた。23、24は土師器の椀である。手ざくねで雑に作られている。23は口径7.4cm、高さ5cm、24は口径8.4cm、高さ4.2cmの小型のものである。胎土からみて地元で作られた土器である。小型で作りも雑なことからみると祭り用に作られた可能性が高い。古墳時代後期後半に作られた。25、26は土師器の高杯である。25は、口径8.8cm、高さ7.2cm、26は、丁寧に作られているが脚部を欠失する。2点とも地元で作られた土器ではない。用途は、食物を盛るために用いる。27は須恵器の杯蓋、28は同じく杯身、29は高杯である。27は口径13.2cm、高さ3cm、28は口径12cm、高さ4.4cm、29は口径12.8cm、高さ6.4cmである。27、28は古墳時代後期後半、29は飛鳥時代に作られたものである。27、28は現在の椀、29は食物を盛るために用いられた。それぞれの時代によく見られる土器である。30は土師器の椀で口径11.2cm、高さ3.8cmである。古墳時代後期後半に他所で作られた。用途は現在の茶椀である。

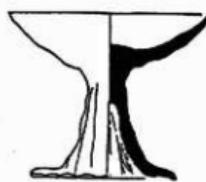
他に各種の須恵器・土師器やコップ形木製品、建築材と思われる木製品とウマの歯などの獸骨が出土している。

#### 弥生時代後期の遺物

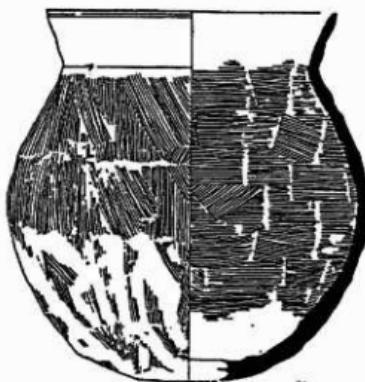
弥生時代後期の溝や河川から出土している。遺物の量は、前記した通り一番少なかったが完形の土器が最も多かった。作られた時代は後期でも前半の頃である。31、32は同じ溝から出土した壺である。31は口径14cm、高さ27cm、32は口径10.6cm、高さ18.1cmである。

31、32は口縁部の形が異なり32には外面に円形浮文と凹線文が付けられている。また、31の腹部には穿孔が1ヶ所認められる。地元で作られた土器である。33は器台で底部を欠失する。口径は20cmである。用途は、壺や甕を置く台である。地元で作られた土器である。34、35は同一の河川から出土した壺である。34は口径13cm、高さ23.6cmで、35は口径9.8cm、高さ20.4cmである。35は壺の中で長頸壺と呼ばれるものである。地元で作られた土器である。36は脚付壺である。口径16.2cm、高さ16cmで、壺の内外面は、丁寧にヘラミガキを施している。このタイプの壺はあまり出土例がない。丁寧に作られていることや形からみて祭りに使われた土器と考えられる。地元で作られたものである。

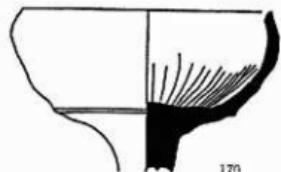
他に石庵丁などの石器、木の実などの植物遺存体も出土している。



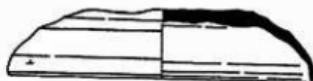
169



21



170



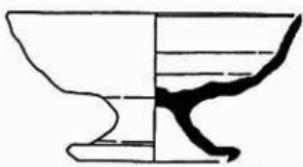
171



172



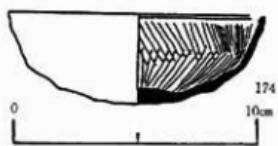
22



173

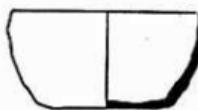


23



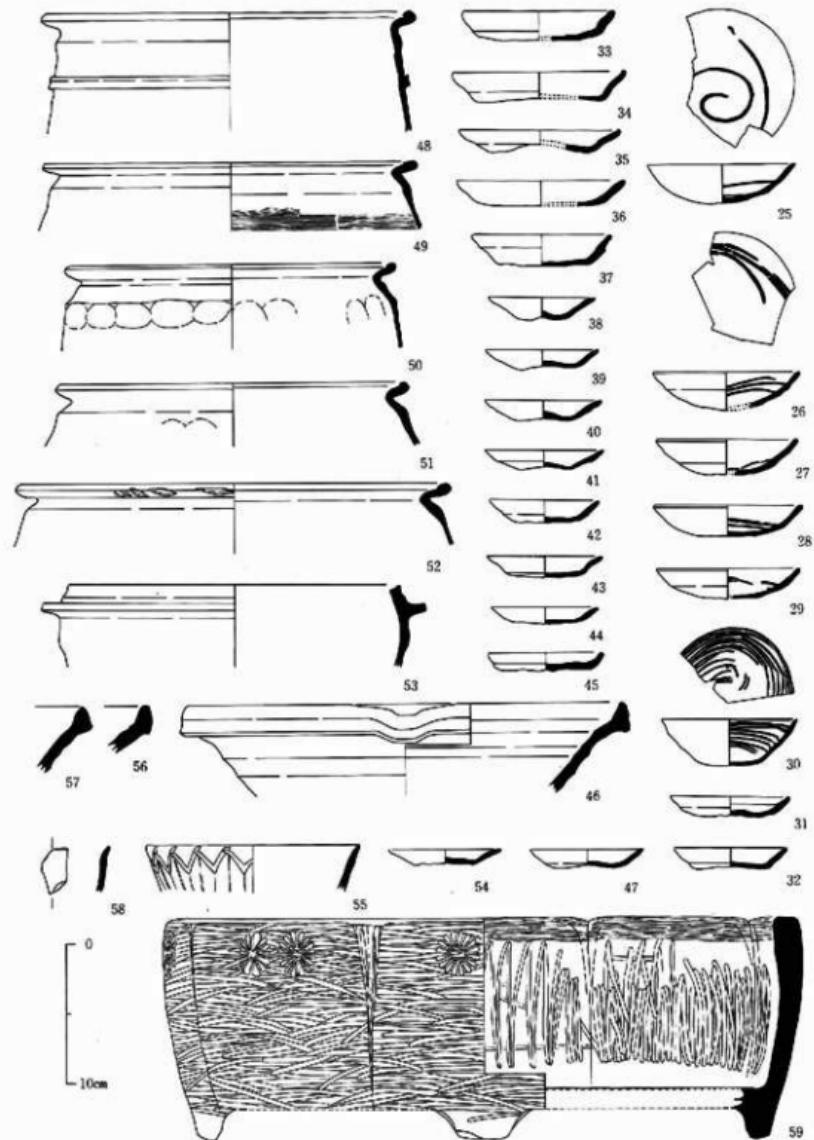
0

10cm



24

第12圖 古墳時代遺物実測図



第13圖 SK-01出土中世土器実測図



第14図 弥生時代後期土器実測図

### 弥生時代中期の遺物

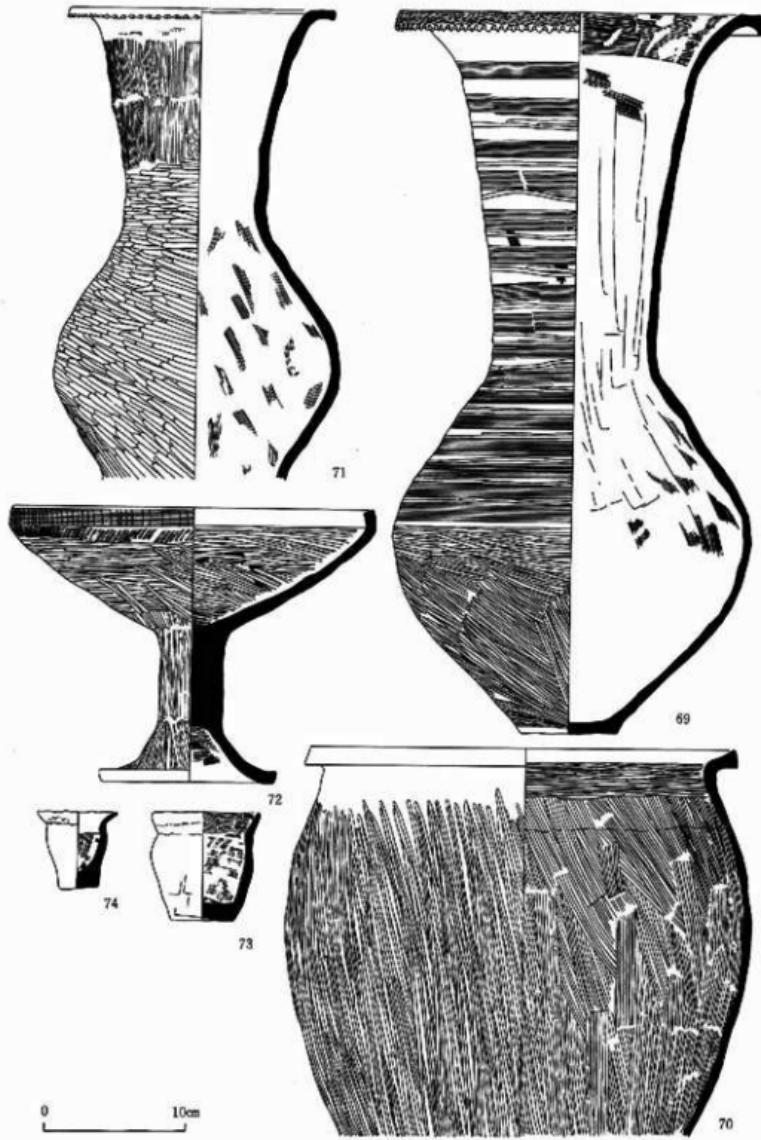
中期初頭から中頃にかけてと中期後半の遺物が多量に出土している。37、39は、甕である。37は口径14cm、高さ27cmで、39は口径15.2cm、高さ23cmである。39は、口縁部内面に横方向のハケメを施す特徴から大和型の甕と呼ばれている。他所で中期初頭から中頃にかけて作られた土器である。38、39は、鉢である。38には把手が付けられている。38は口径14.8cm、高さ6.4cmで、麻状文と呼ばれる文様が口縁部外面につけられている。把手に4つの穴があけられているのは珍しい。現在のカップと同じ用途に用いられたものかもしれない。39は、文様の全く付けられない鉢で口径9.8cm、高さ6.4cmの小型のものである。38は中期後半に、40は中期初頭から中頃にかけて地元で作られた土器である。

他に各種の弥生土器・石庖丁・石鎌・磨製石剣などの石器、広歯・木製品等の木器、イノシシやシカなどの獸骨、桃の実等の植物種子が出土している。縄文時代中期から後期にかけての土器が少量出土しているが、今回は説明を省略する。

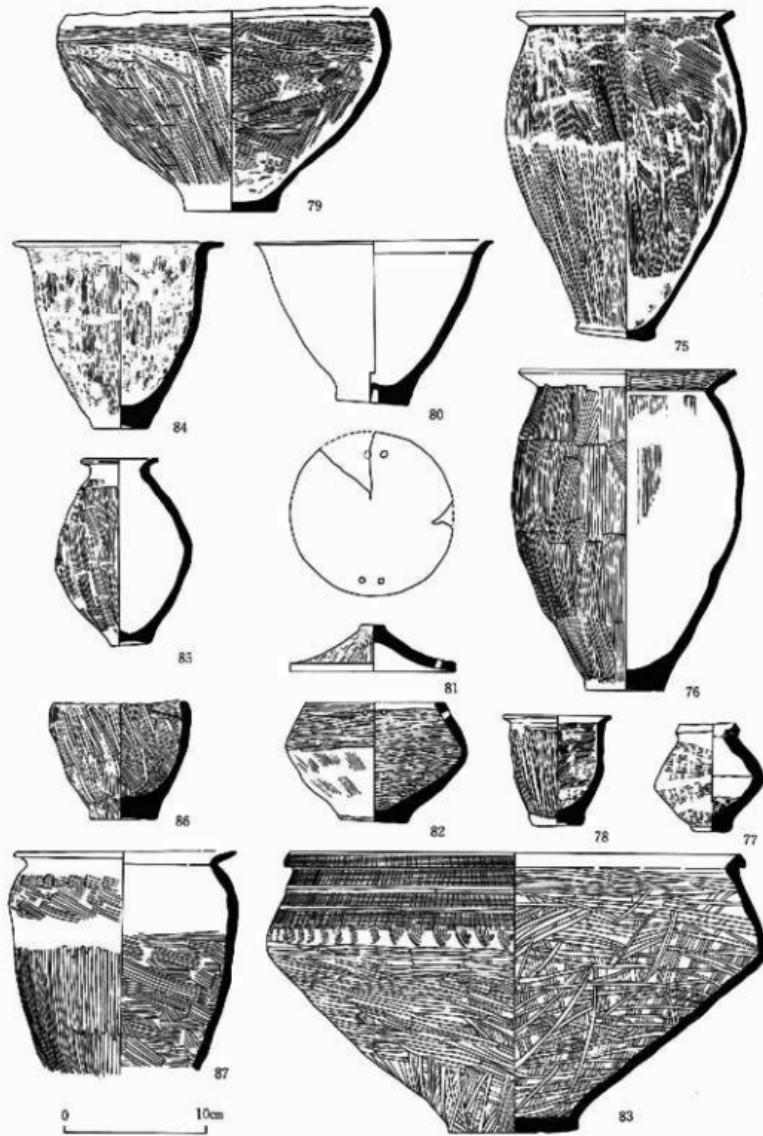
## IV.まとめ

今回の調査で現在までに明らかになった主な点を以下に列記する。

- 1) 調査地全域に本来、中世の集落址が存在したと思われるが、近世の棚田造成による削平でこの時期の遺構の大部分は東端付近にしか残存していなかった。他の部分では深く掘られた土杭墓と井戸が検出されたに留まる。
- 2) 中世の集落は出土遺物からみて鎌倉時代末期から南北朝時代頃のものと思われる。また同時代に調査地中央より西よりで幅約20mの河川が流れおり河川をはさんで集落が存在したものと思われる。
- 3) 奈良時代は河川が流れるのみであったがこの河川でミニチュアのカマド3点セットを使った祭りが行われていた。他に人形(ひとがた)・仿製の海獸葡萄鏡を使った祭りも行われたようである。
- 4) 古墳時代も河川と少數の土塙や溝が存在したのみであるが、遺物の出土状況と土壙などの検出状況からみて、当時の集落は調査地のすぐ南側に広がっていたものと考えられる。また河川に杭を打ち、水流の調節を図っていた。
- 5) 弥生時代後期は、河川が流れ、その南岸には溝が掘られていた。遺物の出土量がさほど多くなかったことを考えると、この時期の集落は、調査地の東方に存在するものと思われる。
- 6) 弥生時代中期末から後期にかけての集落は、河川内の遺物出土状況からみて、調査地中央より西の南側に広がっていたことは確実である。

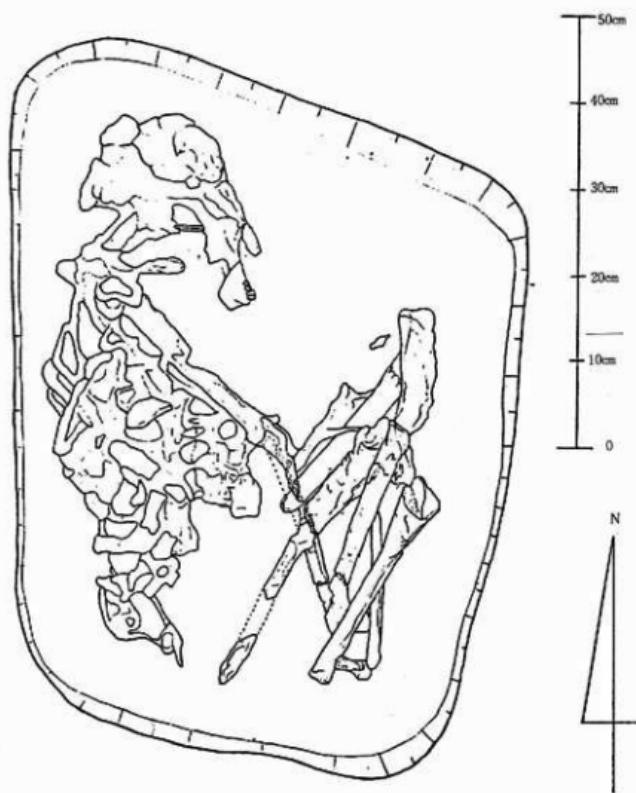


第15図 劣生時代中期土器実測図

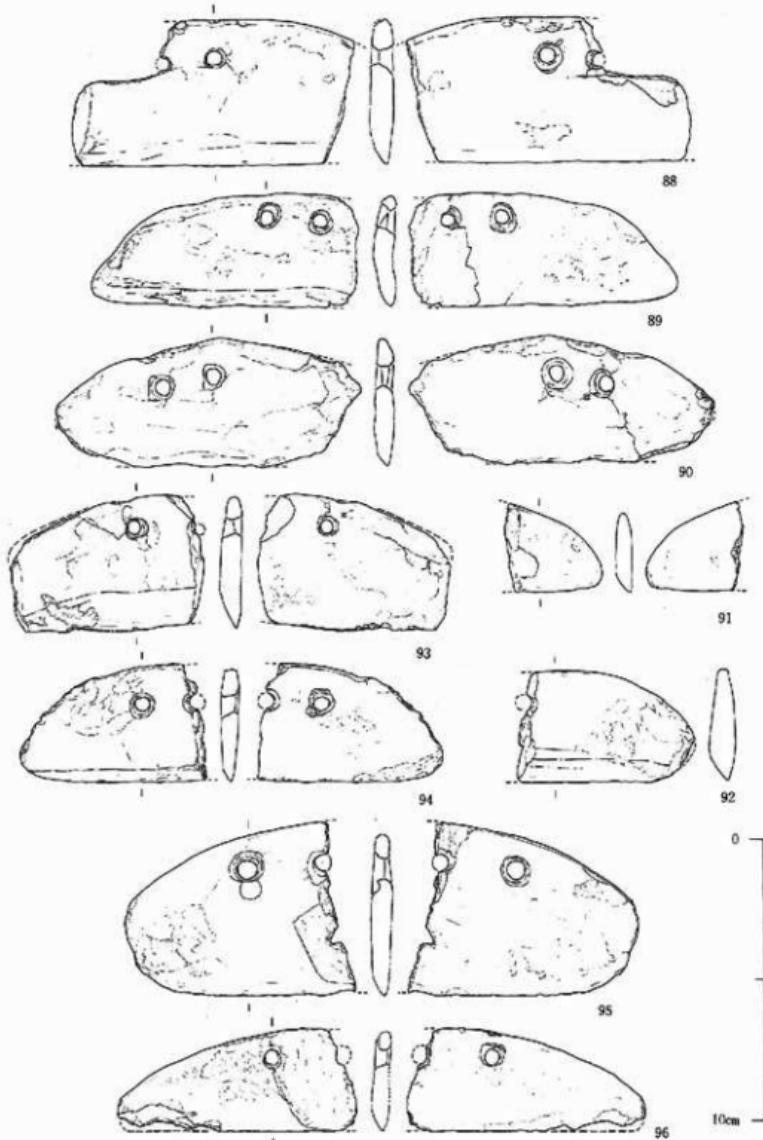


第16図 弥生時代中期土器実測図

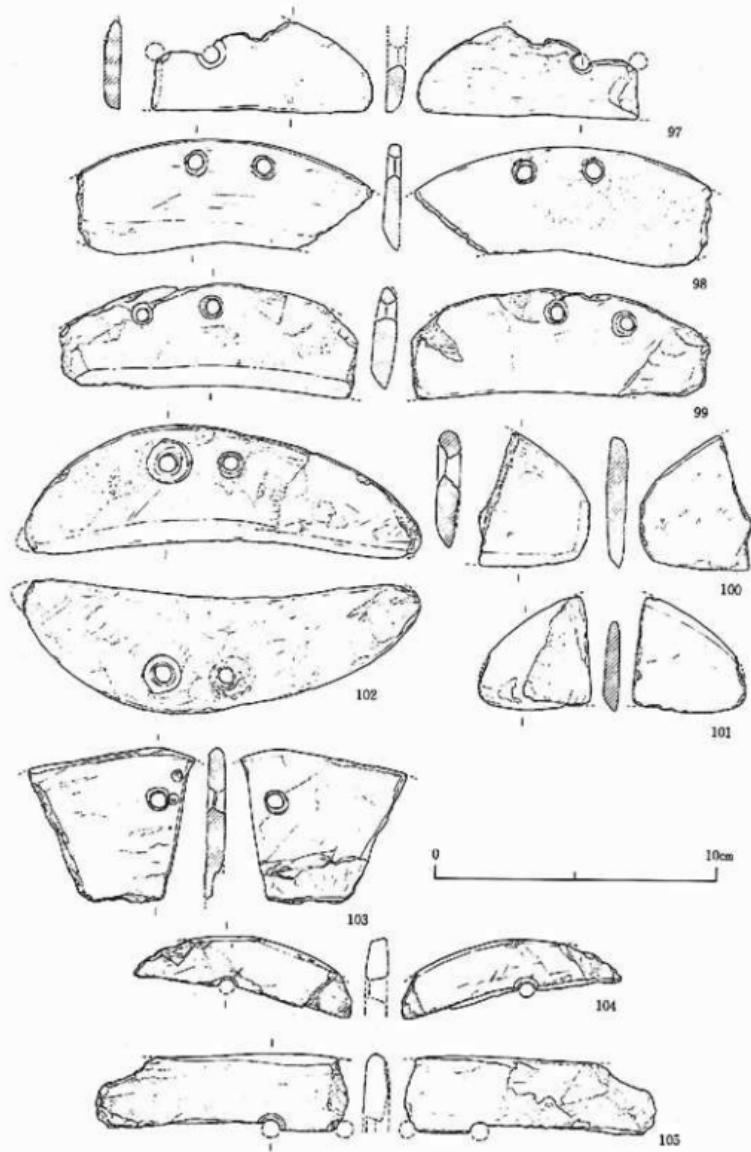
- 7) 弥生時代中期初頭から中頃にかけての河川の遺物出土状況より、この時期の集落は調査地東端の南に存在したと考えられる。
- 8) 出土した遺物のうち、奈良時代の遺物は、当時の祭りの状況を考えるのに重要である。また、東大阪市内では、従来この時期の遺物が少なかったことから、当時の日常雑器を知る上で重要である。



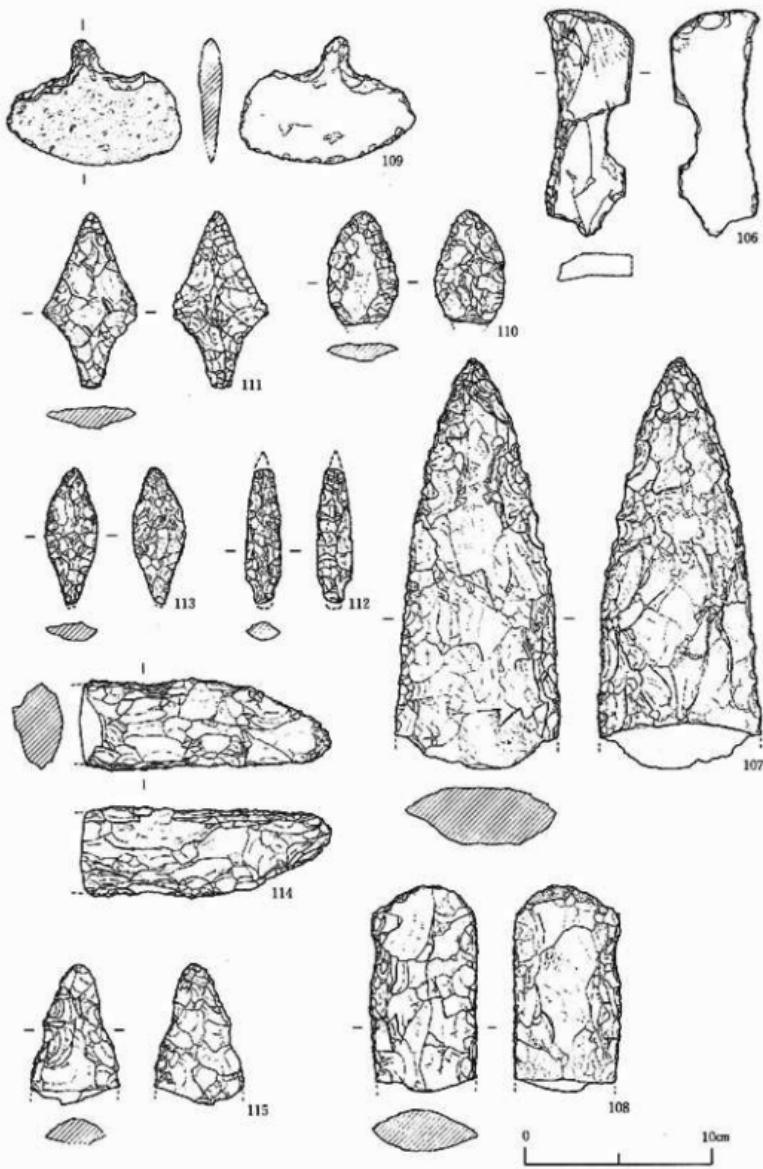
第17図 土塚墓平面実測図



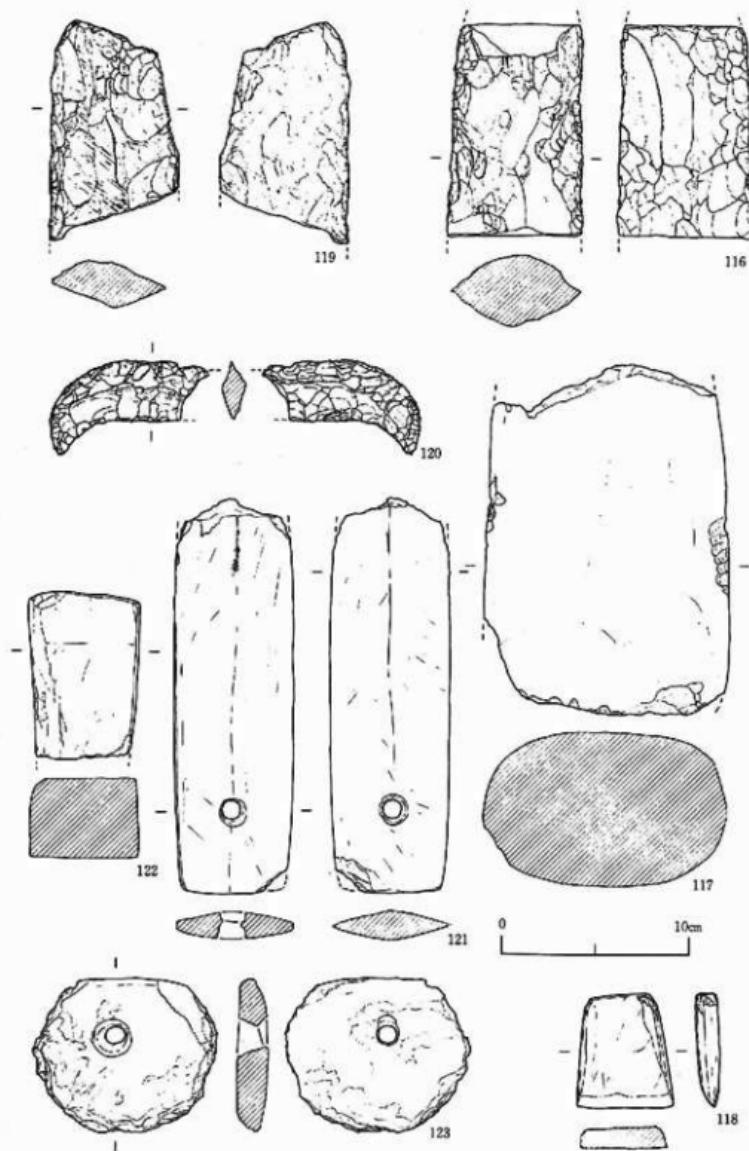
第18圖 石孢丁實測圖



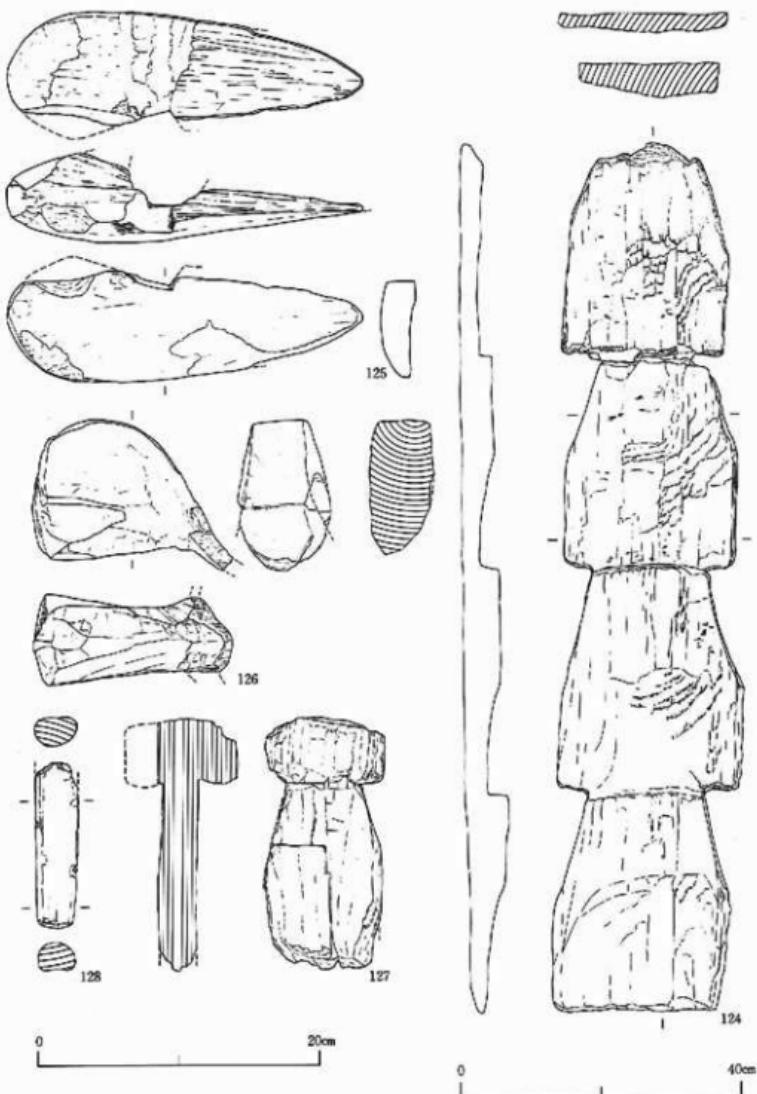
第19図 石庵丁実測図



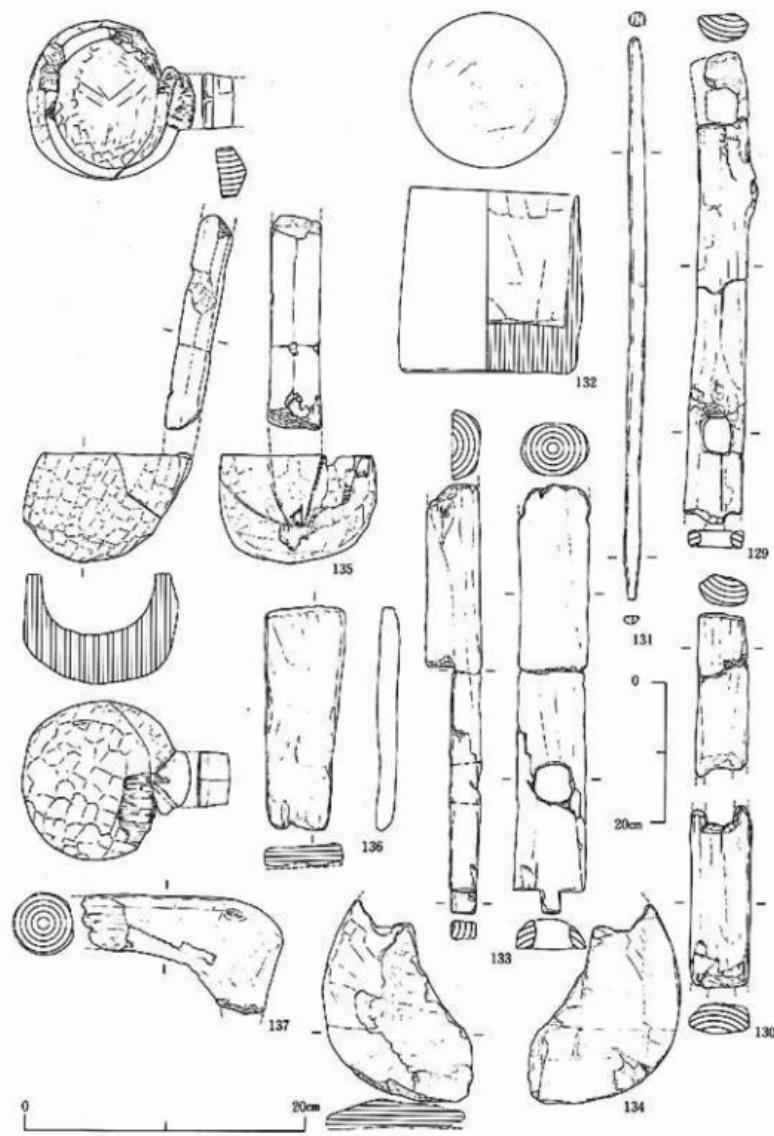
第20圖 打製石器尖測圖



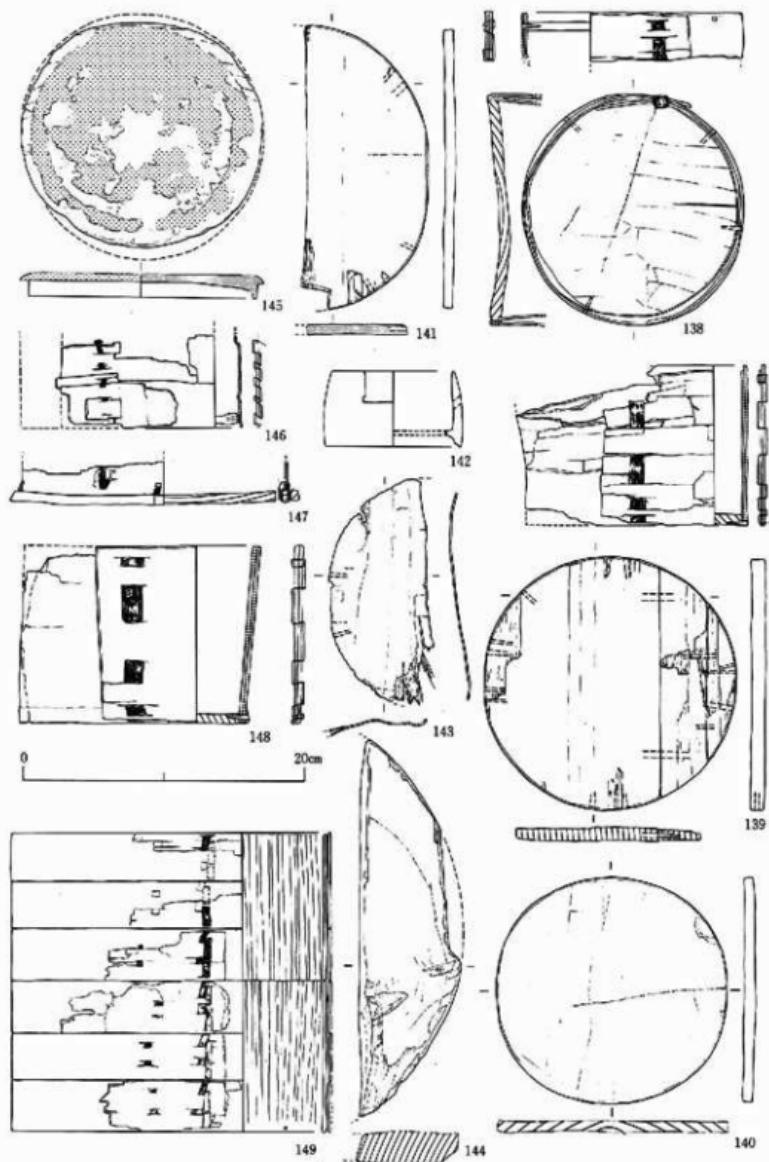
第21圖 石器尖測圖



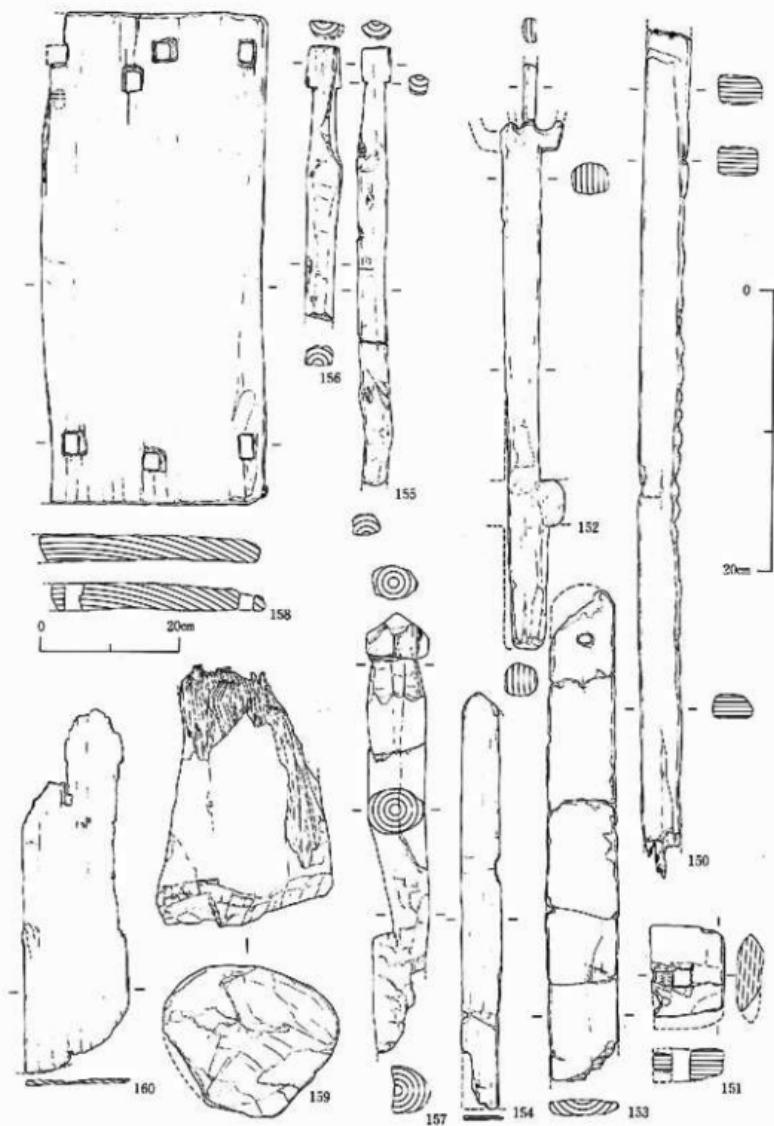
第22図 木製品実測図



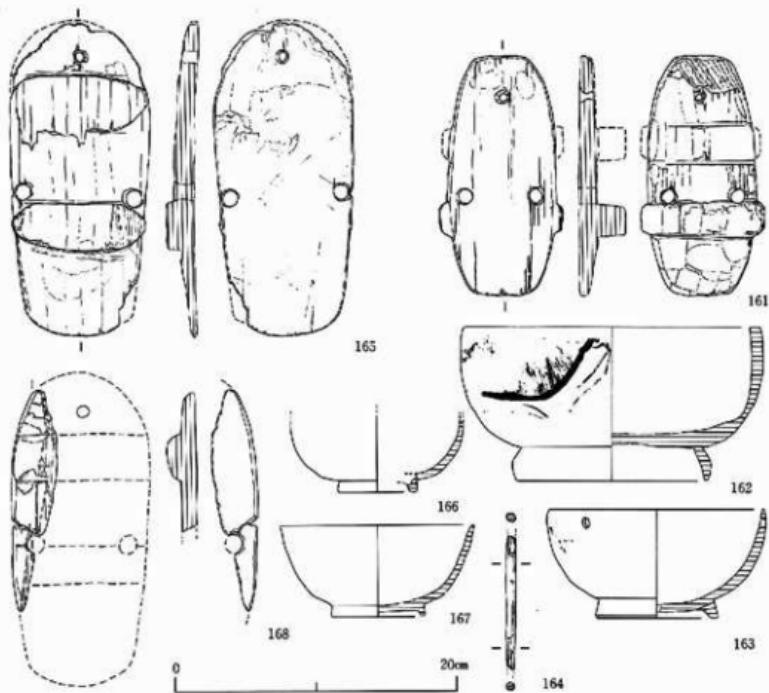
第23圖 木製品実測図



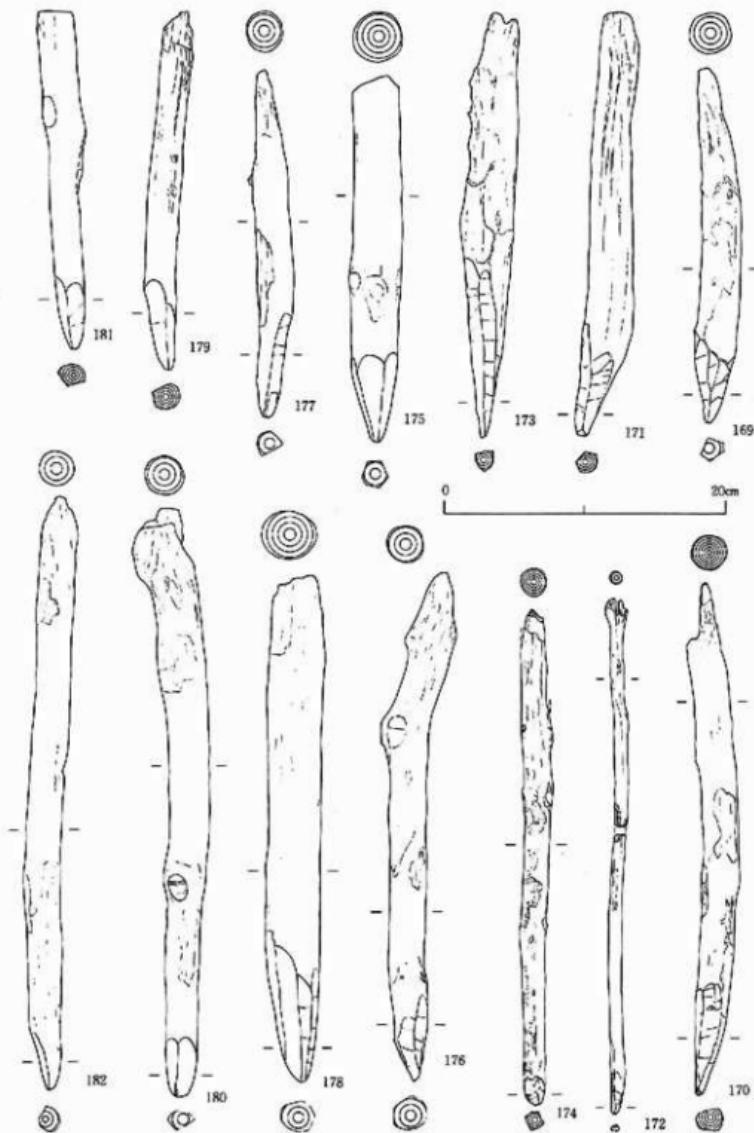
第24図 木製品実測図



第25図 木製品実測図



第26図 木製品(下駄・漆器椀)実測図



第27図 木製品(杭)実測図

# 図 版



調査前風景（第1トレンチを西より望む）



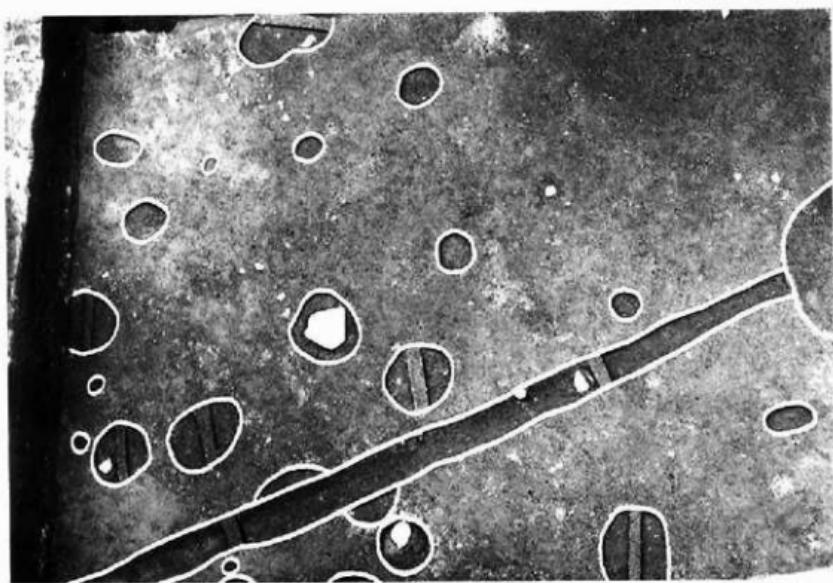
調査地全景（東より）



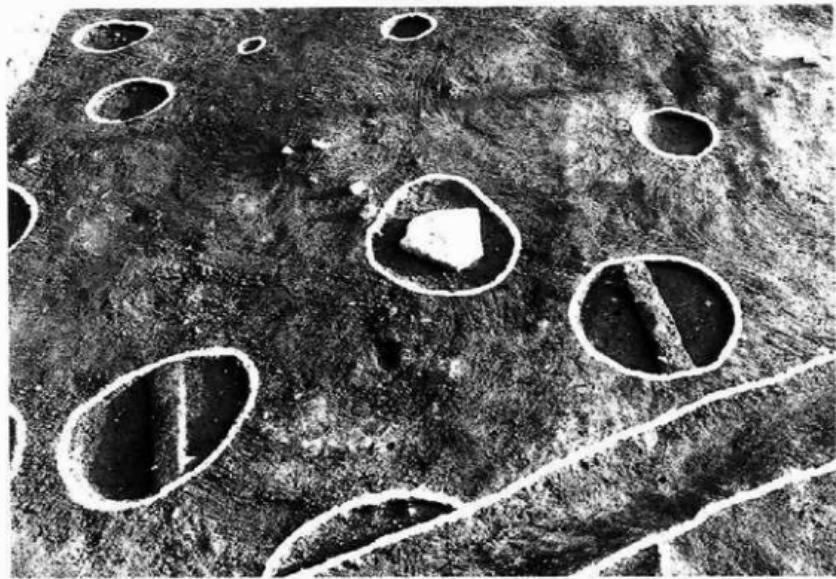
東壁断面（西より）



SE-02検出状況（北より）



中世造構検出状況（北より）



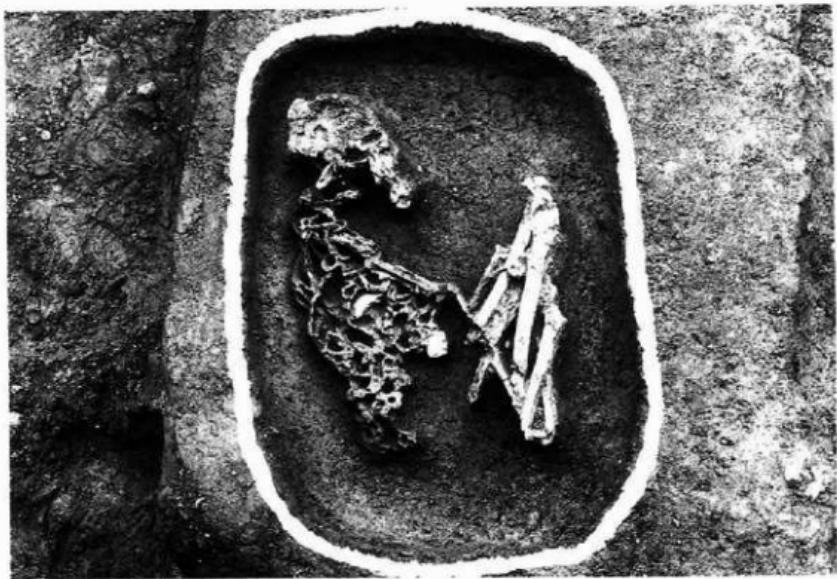
中世造構（柱穴・溝）検出状況（北より）



SE-07完掘状況（東より）



SR-17遺物（下駄）出土状況（北より）



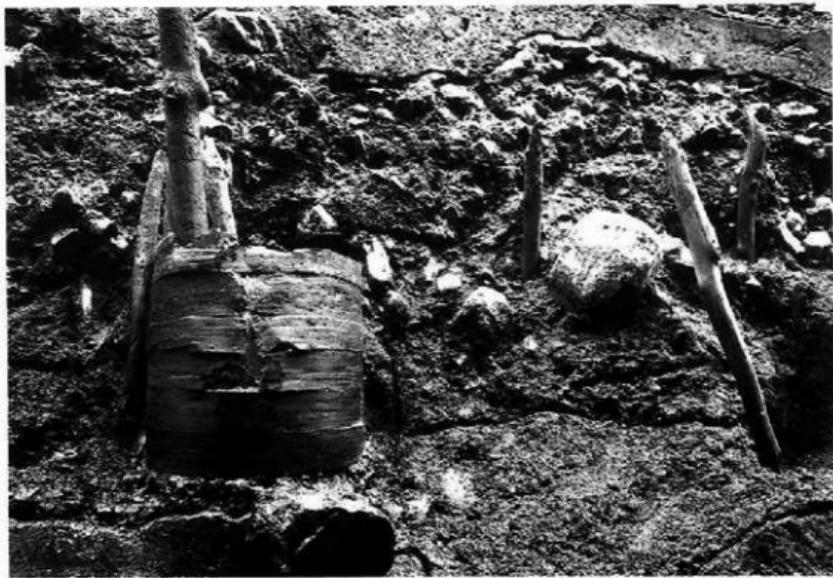
中世土塙墓検出状況（南より）



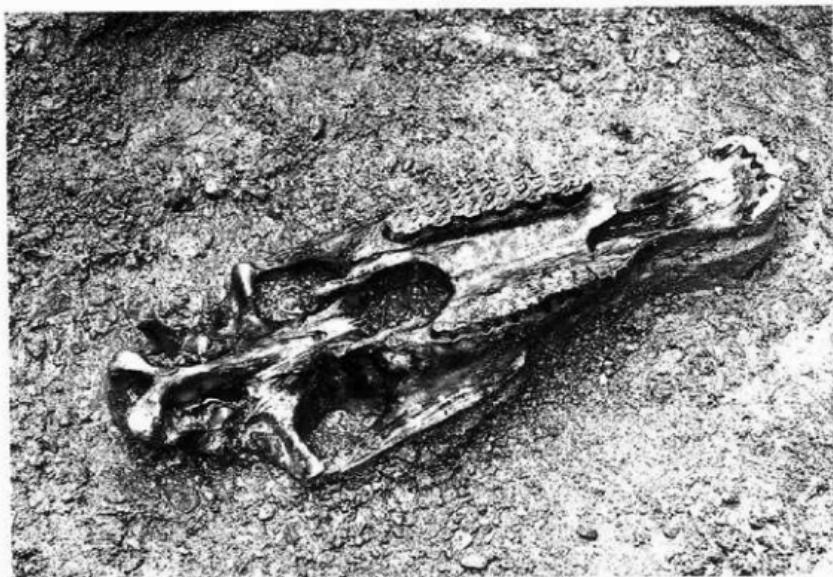
SE-01人形出土状況



中世河川（SR-17）検出状況（東より）



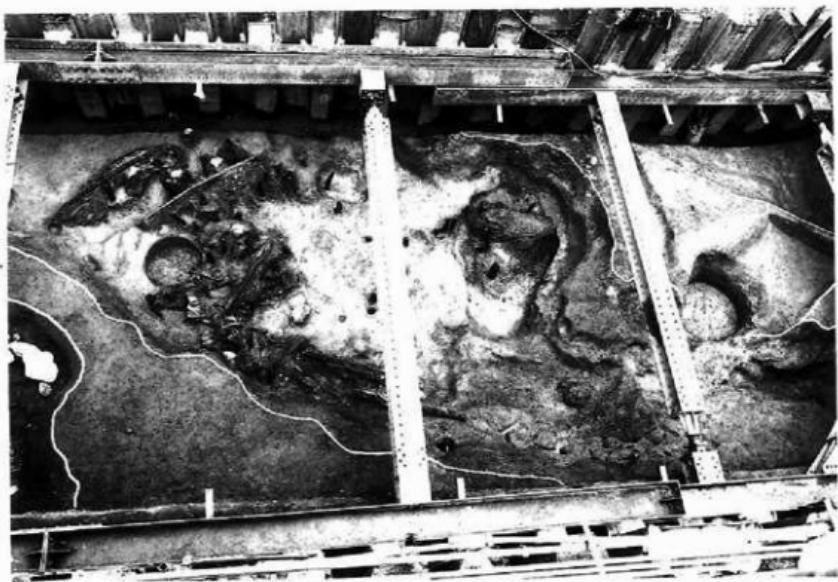
SE-09検出状況（南より）



SR-17獣骨（ウマ）出土状況（北より）



SR-17獣骨（ウシ）出土状況（東より）



奈良時代河川（SR-II）検出状況（北より）



奈良時代河川（SR-II）遺物出土状況（北より）



奈良時代河川（SR-11）銅鏡出土状況（東より）



奈良時代河川（SR-11）須恵器出土状況（南より）



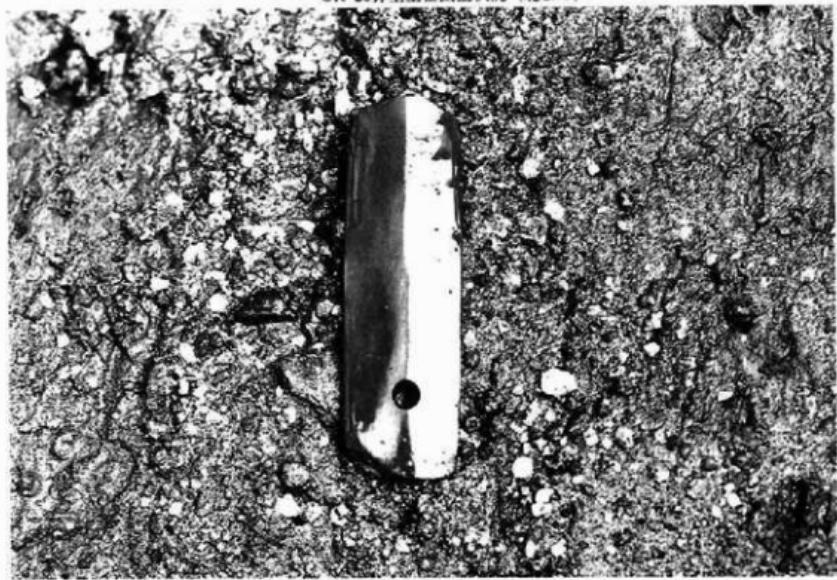
SD-89弥生土器出土状況（西より）



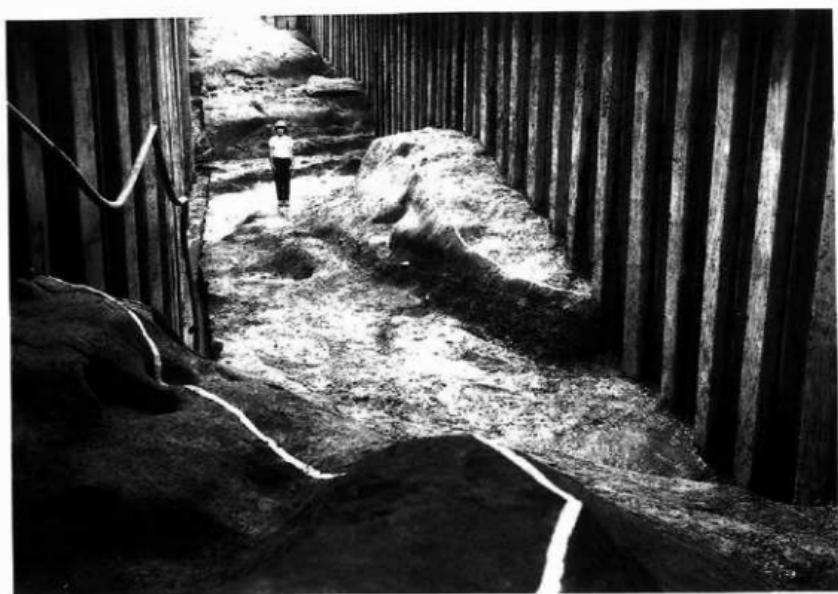
弥生土器出土状況（南より）



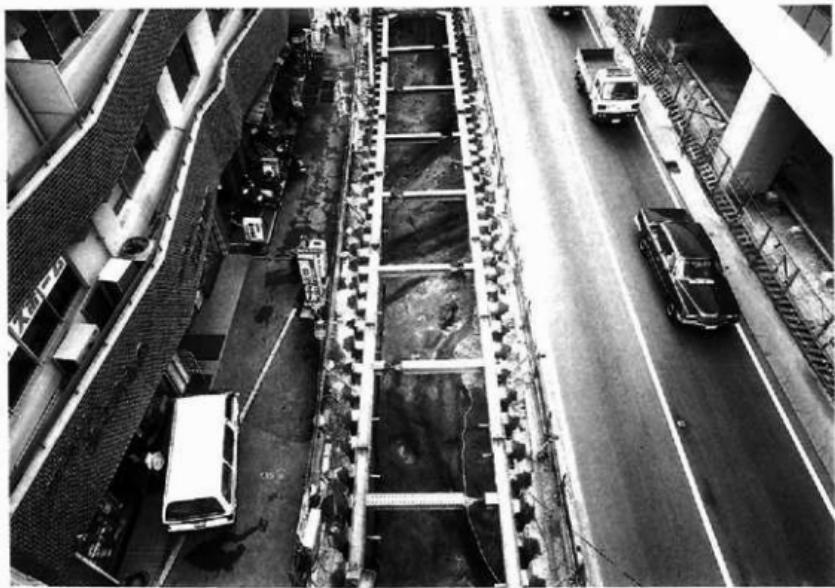
SR-25号生土器出土状況（北より）



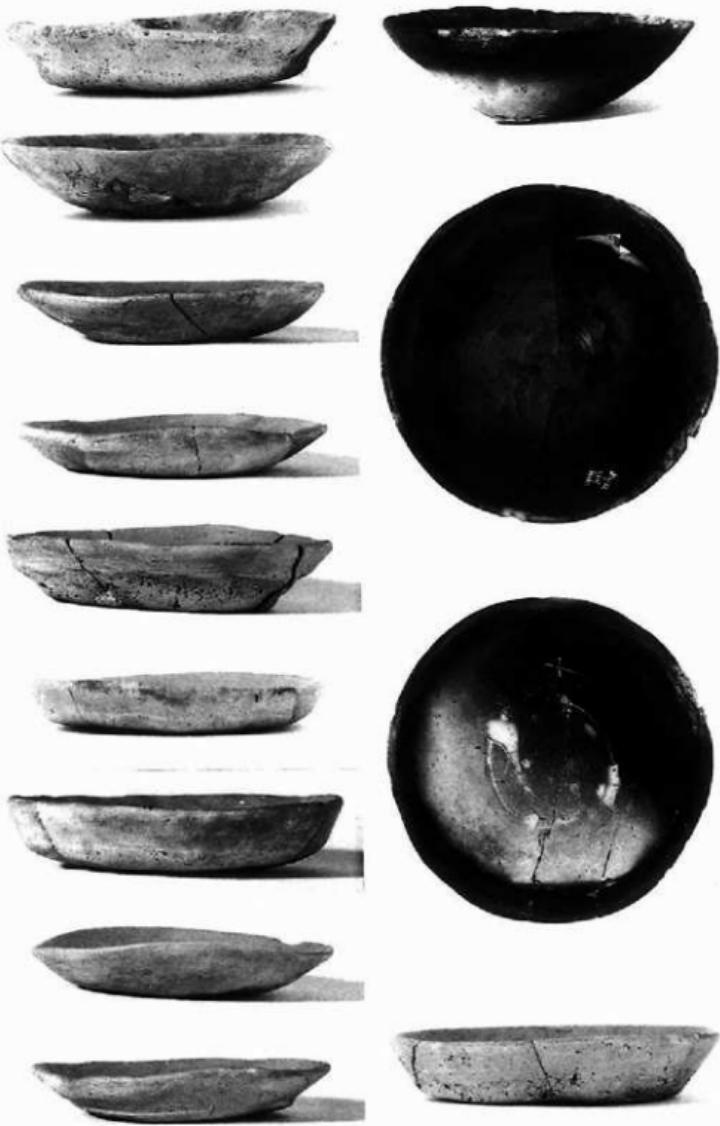
磨製石剣検出状況



弥生時代河川検出状況（東より）



弥生時代河川検出状況全景（東より）



土師器小皿・瓦器碗



土師器小型壺・須恵器提瓶・土馬



土師器甕・弥生土器甕・器台・台付鉢



弥生土器壹



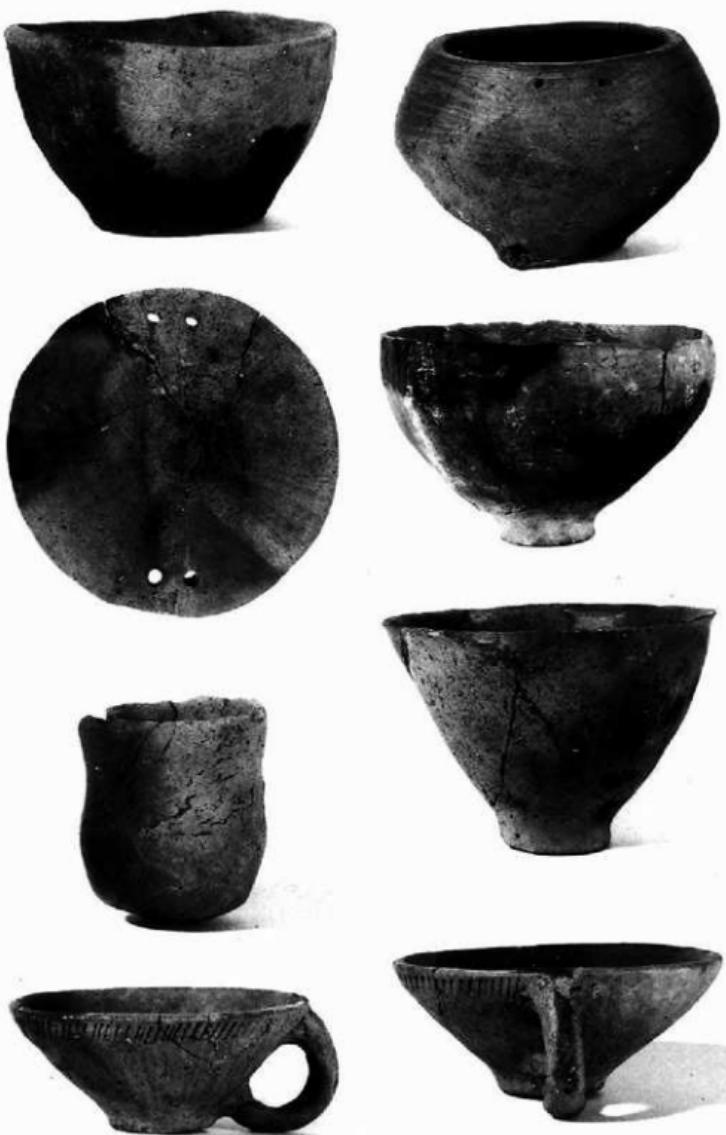
再生土器蓋



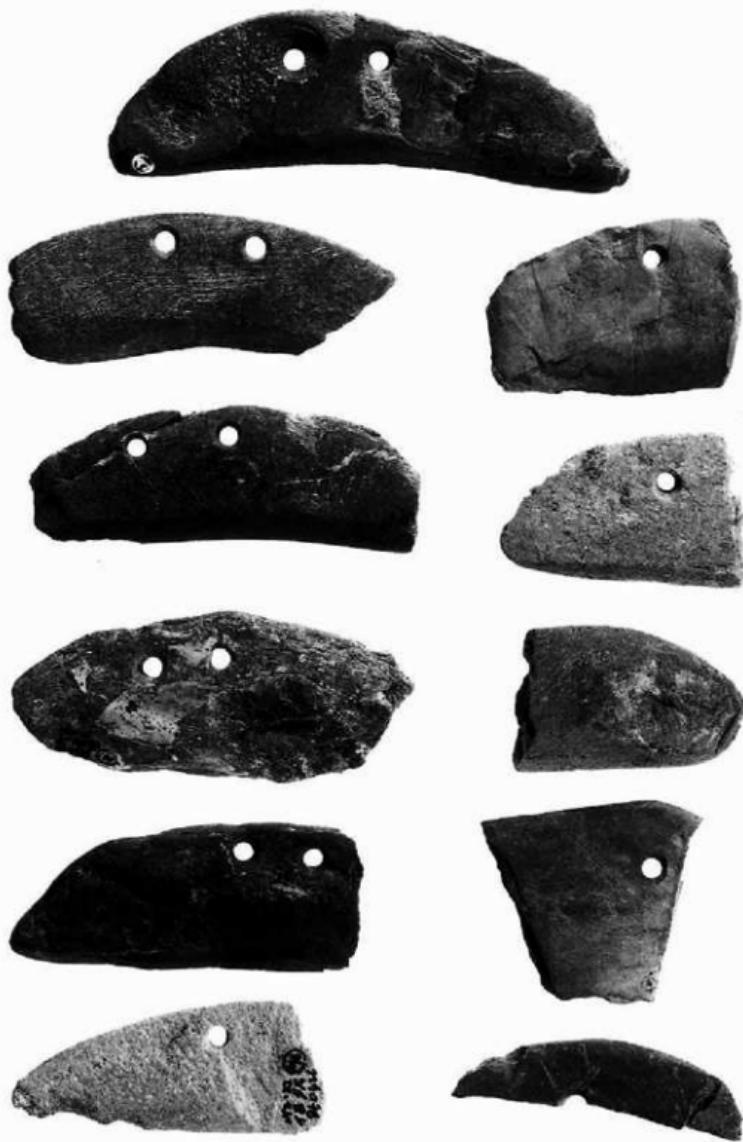
弥生土器壺・甕・高杯



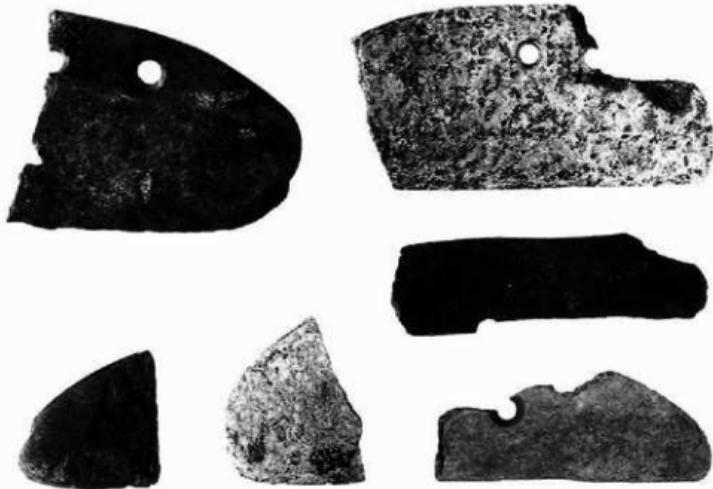
弥生土器類



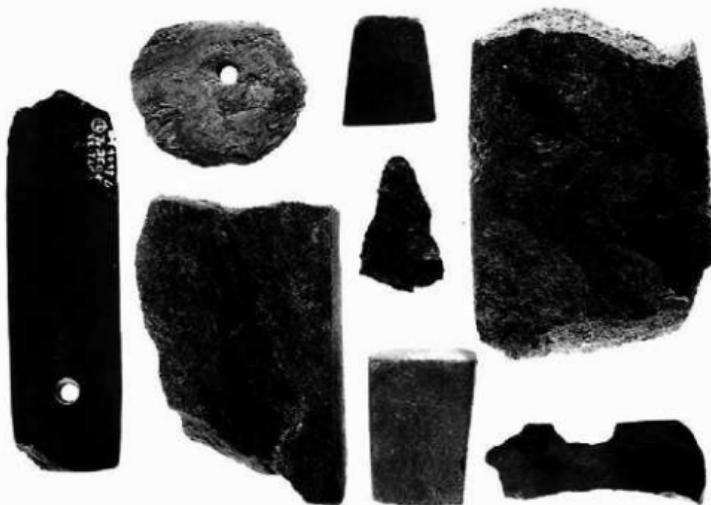
弥生土器鉢



石庵丁



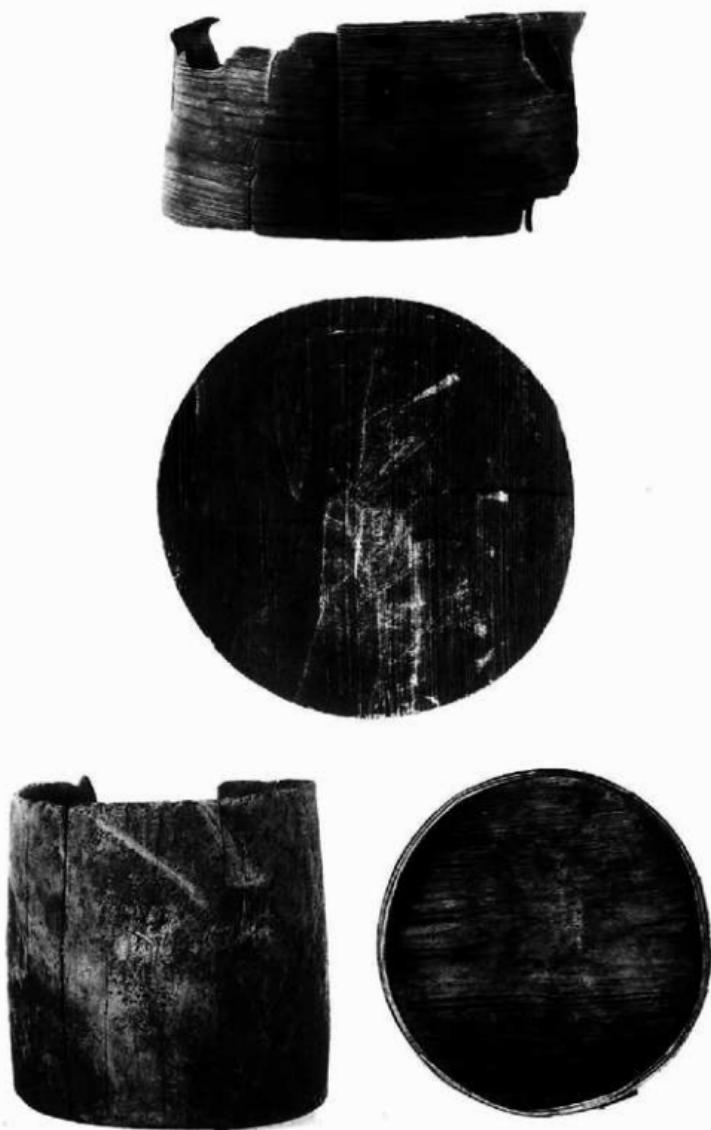
石庖丁



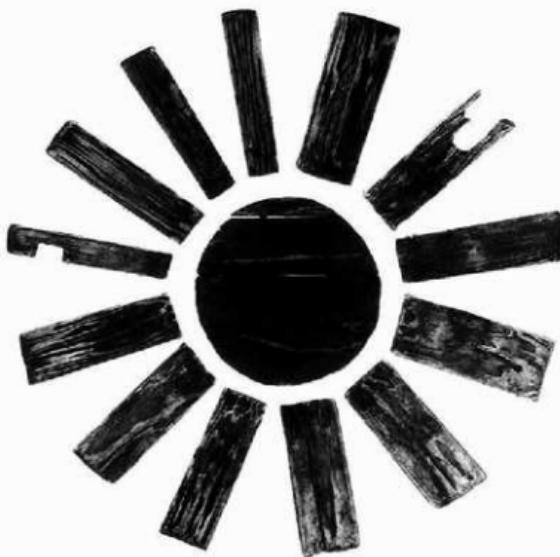
磨製石劍·石斧·石鎚



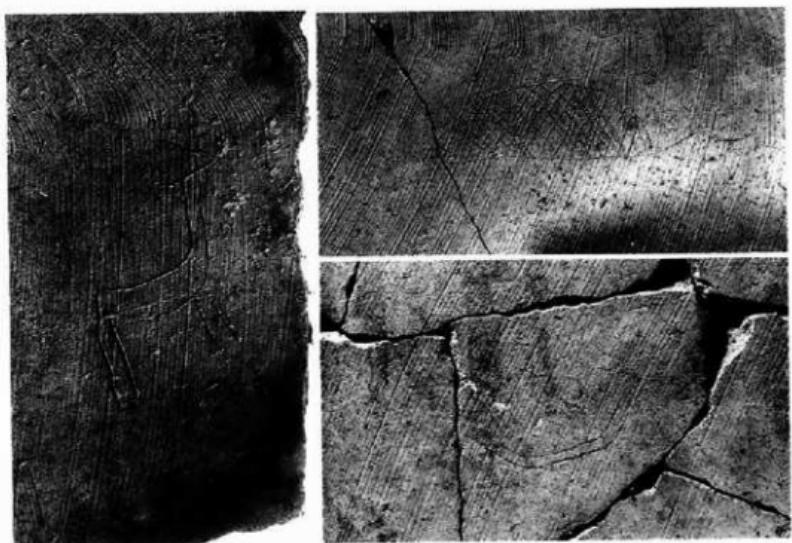
杭



木製容器・曲物



桶



絵画土器（シカ他）・ウマ頭骨

西ノ辻遺跡第22次発掘調査報告

平成 2 年 3 月 31 日

発行 東大阪市教育委員会  
財団法人 東大阪市文化財協会

印刷 明文堂工業株式会社